

中原・和田遺跡

—埋蔵文化財発掘調査報告書—

1974

茅野市教育委員会

中原・和田遺跡

—埋蔵文化財発掘調査報告書—

1974

茅野市教育委員会

序

中ノ原遺跡は茅野市湖東山口部落の北台地に位置する。昔からこの地域は縄文の破片の採集地として学童などに有名であり、昭和4年には伏見宮が諏訪遺跡調査の際、尖石と共にここも発掘されている。

本調査は山口部落が農地開発のため、茅野市の農林課の協力によって、幅4mの農道を開設するにともない、市教育委員会に依頼し、緊急発掘をし記録保存をすることになった次第である。時あたかも夏季にあたり、農村は出稼や他出者が多く、山口部落は人口的にも少人数の部落だったので区長が率先して陣頭に立ち、各戸に人頭割をするなど、誠にその労を謝したい。なお作物の関係やその他、秋の水田収穫前だったので、その損傷を避けるために後にブルトーラーを使用して耕土を行なった部分もあっかが、僅か4mの農道予定地から住居址10基が発見され、うち完掘したものが2基で、誠に貴重な収穫であった。

和田遺跡は茅野市玉川小泉区の台地の南斜面の地で、すでに昭和44年から長野県企業局の主体の開発が行なわれ、これに伴う緊急調査の報告書が「茅野和田遺跡」として茅野市教育委員会から発刊されているが、その残された東台地の舌状部南斜面の一部を改めて昭和49年に茅野市教育委員会において文化財調査費を計上し、県企業局の同意を得、10月2日から11月1日まで発掘調査を行なった。この発掘については、前の報告書において諸先生方から色々とご指導ご助言を賜っているので贅言を要しない。本報告書の作成は主事宮坂虎次氏があたり、土器復原には宮坂篤夫、柳平嘉彦の両氏が、また刊行については教育委員会教育長木川千年氏をはじめ各位の温いご理解によることを感謝しながら序とする。

昭和49年3月

茅野市文化財審議委員長 小 平 実 人

目 次

序

挿図目次

第1編 中ッ原遺跡

第Ⅰ章 位置および環境.....	3
第Ⅱ章 調査の経過.....	5
第Ⅲ章 遺構.....	8
1. 住居址.....	8
2. 特殊遺構.....	15
第Ⅳ章 遺物.....	16
1. 土器.....	16
2. 石器.....	28
第Ⅴ章 総括.....	35

第2編 和田遺跡

Iはじめ.....	39
II 遺構.....	40
第1号住居址.....	40
第2号住居址.....	42
第3号住居址.....	42
第4号住居址.....	44
III 遺物.....	45
土器.....	45
石器.....	51
IV おわりに.....	52

挿 図 目 次

中ヶ原遺跡

- 第1図 遺跡付近図 (50,000分の1)
- 第2図 地形図 (2,500分の1)
- 第3図 遺構配置図 (600分の1)
- 第4図 第1号住居址 (80分の1)
- 第5図 第2号・3号・4号住居址 (80分の1)
- 第6図 第5号住居址 (80分の1)
- 第7図 第6号住居址 (80分の1)
- 第8図 第7号住居址 (80分の1)
- 第9図 第8号住居址 (80分の1)
- 第10図 第9号住居址 (80分の1)
- 第11図 第10号住居址 (80分の1)
- 第12図 ピット1号 (20分の1)
- 第13図 ピット3号 (20分の1)
- 第14図 東第3区出土土器実測図及び拓影 (3分の1)
- 第15図 第6号住居址出土土器拓影 (3分の1)
- 第16図 第6号住居址出土土器拓影 (3分の1)
- 第17図 第5号住居址出土土器実測図及び拓影 (6分の1, 3分の1)
- 第18図 第7号・8号住居址出土土器実測図および拓影 (3分の1)
- 第19図 第3号・4号住居址出土土器実測図及び拓影 (6分の1, 3分の1)
- 第20図 第1号住居址出土土器拓影 (3分の1)
- 第21図 第1号・2号住居址出土土器拓影 (3分の1)
- 第22図 第9号・10号住居址出土土器拓影 (3分の1)
- 第23図 繩文後期土器実測図及び拓影 (6分の1, 3分の1)
- 第24図 石器実測図 (2分の1)
- 第25図 石器実測図 (3分の1)

第 26 図 石器実測図（3 分の 1）

第 27 図 石器実測図（3 分の 1）

第 28 図 石器実測図（3 分の 1）

第 29 図 石器実測図（3 分の 1）

和田遺跡

第 1 図 発掘区域図

第 2 図 住居址配置図

第 3 図 第 1 号住居址（80 分の 1）

第 4 図 第 3 号住居址（80 分の 1）

第 5 図 第 4 号住居址（80 分の 1）

第 6 図 第 2 号住居址（80 分の 1）

第 7 図 ピット 4 号（20 分の 1）

第 8 図 楕円押型文土器拓影（実大）

第 9 図 第 1, 第 3 号住居址出土土器拓影（3 分の 1）

第 10 図 第 3 号住居址出土土器実測図（6 分の 1）

第 11 図 第 3 号住居址出土土器実測図（6 分の 1）

第 12 図 第 4 号住居址出土土器拓影（3 分の 1）

第 13 図 石器実測図（3 分の 1）

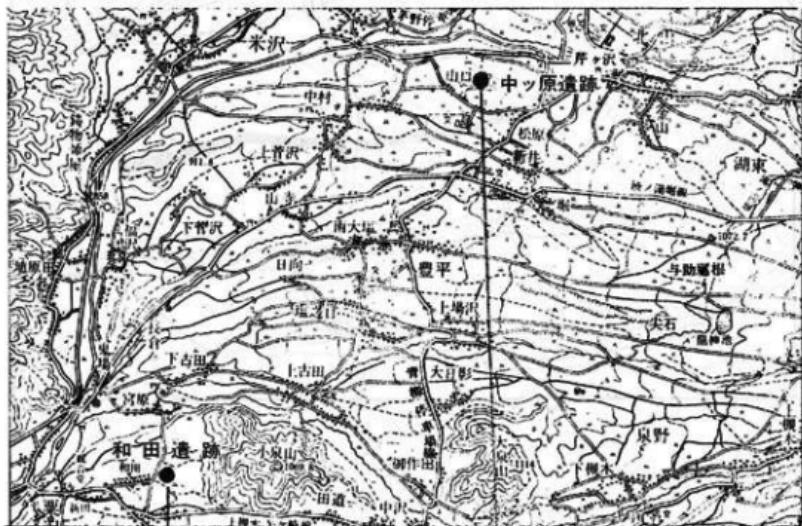
第 14 図 石器実測図（3 分の 1）

第 15 図 石器実測図（2 分の 1）

第1編 中ッ原遺跡

第Ⅰ章 位置および環境

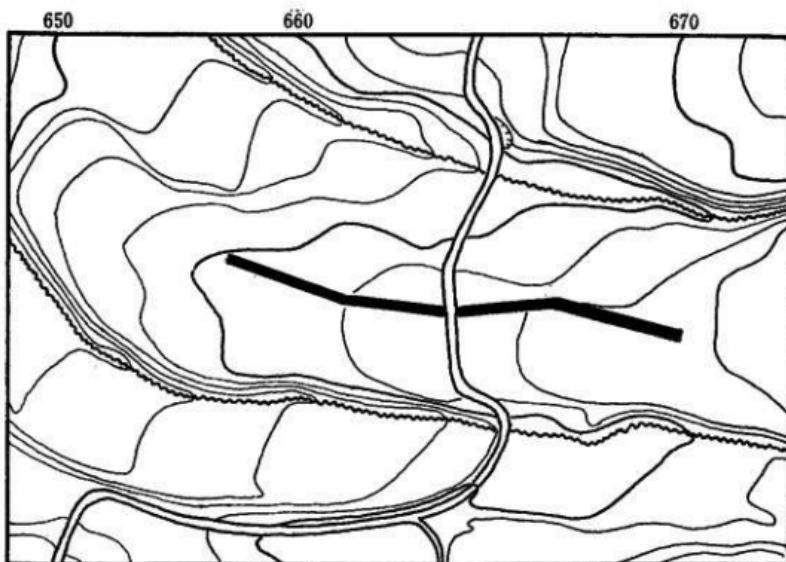
遺跡は茅野駅の東北方約7kmの、茅野市湖東山口部落の北台地に位置し、標高は950mである。八ヶ岳西山麓に展開する台地は、上方においては幅広く、小溪流により次第にいくつもの東西に長い



第1図 遺跡付近図 (50,000分の1)

台地に分岐する。中ノ原台地もまた、天狗岳を水源とする渋川の南に広がる台地が分岐した舌状台地の一つである。南側台地には山口部落が立地し、北側台地には中央を蓼科有料道路が東西に通じている。これら舌状台地は、湧水のある渓との比高が少なく、南は緩傾斜で日当りよく遺跡として好適な条件を備えており、付近の各台地にはいくつもの遺跡が点在する。すなわち、上方600mには織文前期末の下島遺跡が、更にその東500mには織文前期中葉の神ノ木遺跡、南台地には織文中期の松原遺跡・山口氏神遺跡・新井下遺跡が位置する。

遺跡の所在する中ノ原は幅120m長さ250mの舌状台地で、湧水のある幅50mの浅い渓により山口部落のある台地に対している。台地は畑として耕作され、台地の中央を幅3mの農道が南北に通



第2図 地形図 (2,500 分の 1) (黒線が調査トレンチ)

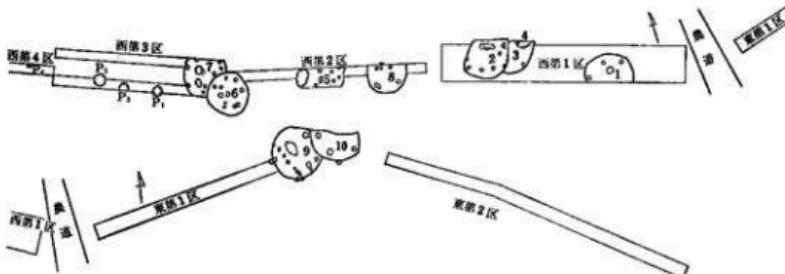
じ、農道の東西に遺物が散布している。縄文時代の遺跡としては古くから著名で、諏訪史第1巻にも山口採集として石皿・石冠が記載されている。昭和4年伏見宮博英王殿下もまた諏訪遺跡調査の際、尖石遺跡とともにこの遺跡においても発掘を実施されたとのことである。また昭和11年頃、この農道拡張工事のとき、貯蔵されたと推定される黒曜石塊群が発見され、この遺跡出土の顔面把手が尖石考古館に所蔵されている。

第Ⅱ章 調査の経過

1. 調査の概要

本調査は基科有料道路から分岐して、台地中央を東西に通ずる農道開設工事にともなう記録保存のための発掘調査である。農道開設は、山口区の茅野市補助金事業による工事のため、調査費については茅野市農林課と山口区のはば折半負担とし、発掘作業は区民全戸の奉仕により、茅野市教育委員会が発掘調査を実施した。工事の開始が10月と予定され、かつ工事関係機関からの教育委員会への連絡が7月中旬であったため、発掘作業は畑作物の最も大事な時期にあたり、道路予定幅4m以外の拡張発掘はほとんど不可能であった。発掘作業は9月7日から開始され、農繁期を避けて10月19日によくやく終了した。調査は南北に通ずる道路を基点とし、西側の畠、地番6405, 6412, 6413, 6418, をそれぞれ西第1区、第2区、第3区、第4区とし、東側の畠、地番6452, 6455, 6456, を東第1区、第2区、第3区とした。各畠の作物の種類および栽培状況により、その畠に適したトレンチを設定した。最も苦慮したのは作物への損傷を避けるための排土の処置で、最後にはいったん盛り上げた土砂の下の遺構を調査するためにブルトーラーを使用して排土を行なった。

発見された住居址は10基で、そのうちほぼ完掘できたのは2基である。この他、特殊遺構としてピット4、独立土器1が検出された。



第3図 遺構配図図(600分の1)

西第1区

農道は西地区においては台地の頂部を通過する。この畑は南北に通ずる道路に接した畑で、路線南側は桑畑、路線内は馬鈴薯、北側は大豆が栽培されていた。道路を予定して路線幅だけ馬鈴薯を作付けしたことである。路線の左右両端に接して幅1m、長さ26.5mの2条のトレンチを設定する。黒土層30cm、褐色土層10cmで基盤のローム層に達する。東寄りに第1号住居址が発見され、西寄りから第2号、3号の住居址が発見された。最初2号、3号の堆土の置き場がなく、ブルトーザーにて2号を埋め戻した後で3号を調査し、第4号住居址埋廃の発見となった。また地表下20~30cmの黒土層中に焼土の堆積があり、若干の縄文後期畠之内式土器破片が検出された。

西第2区

道路敷を残して両側にりんどうが栽培されていた。出荷期を控えたりんどうを損傷しないよう配慮して、中央に幅1m、長さ18mのトレンチを設定した。トレンチの東部分に第8号住居址、中央より西寄りに第5号住居址を発見したが、共に完掘にいたらなかった。

西第3区

路線の左右に幅1m、長さ18mのトレンチ2条を設定する。南側は作物が栽培されていなかったため、第6号住居址は地主の了解を得て拡張発掘しほぼ完掘できたが、北側は大根が作付けされていたため、これにかかる第7号住居址は北部分の調査ができなかった。この2基の住居址は畑の東端で重複していた。住居址の西からはピット3カ所が発見された。地層は黒土層20cm 褐色土層15cmでローム層に達する。総体的に表土が薄くなり、地形は次第に西に緩傾斜する。ピット3号および周辺から縄文後期畠之内式土器が検出された。

西第4区

路線の南側は南瓜が、北側は大豆が栽培されていた。収穫前の大豆畑を避けて、中心杭より南50cm寄りに、幅1m、長さ14mのトレンチを設定した。この畑の路線は台地頂部をはずれて僅かに北に寄る。黒土層25cm、褐色土層21cmでローム層に達する。2個の連続するピット4号の他は遺構は発見されなかった。遺物の検出も中期土器破片が僅かで、地表に黒曜石剝片等も少ない。遺跡の西の限界と思われるが、南傾斜面には若干の遺構の存在が予想される。

東第1区

南北に通ずる農道に接した畑で、路線はこの畑を東北に向かって斜めに横切り、台地の北斜面に移行する。したがって道路は造構の密集する台地頂部および南斜面を避けて通過する。この畑は数年前にブルトーザーにより削平したため、埋めたてた南斜面を残しては、造構は削られてしまっただろうとのことであったが、路線が北斜面に移行したため、路線東端において重複する2基の住居址9号と10号を調査することができた。路線中央に幅1.5m、長さ30mのトレンチを設定した。トレンチの西部分では褐色土層まで削平されていたが、残存した褐色土層中より木島式に比定される薄手土器の断片1と小型石匙3点を検出することができた。

東第2区

この畑は小豆が栽培されていたため、調査は最後に残され、10月に入って実施した。1区の畑とは高さ1mの土手により区切られ、路線はこの畑の北端の土手に沿って通過する。土手の高さは80cm~120cmで、一段低い北の畑となる。北に傾斜する地形を埋めて土手を築いたため黒土層が深い。トレンチの幅は1.5m、長さは36.6mである。トレンチ西端で黒土層37cm、褐色土層41cm、中央付近で黒土層80cm、褐色土層31cm、東端で黒土層44cm、褐色土層23cmで、中央部の黒土層が厚い。地表下40~50cmの黒土層から褐色土層上部にかけて縄文中期土器破片がしばしば出土するが、それ以下から余り検出されなかった。造構は全く無かった。

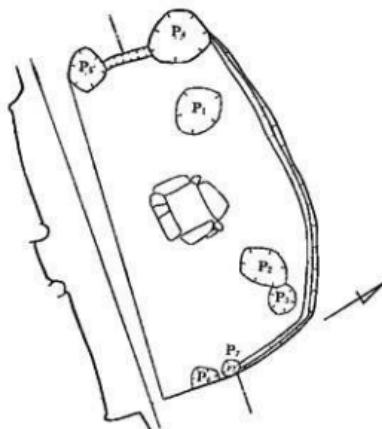
東第3区

この畑は大豆とシャクヤクが栽培されていた。北側は高さ1mの土手を隔てて一段下の畑と接している。土手に沿って幅1m、長さ13mのトレンチを設定した。トレンチ東端の6区より独立埋甕を発見した。埋甕付近の地層は、黒土層48cm 褐色土層25cmで基盤のローム層に達する。このトレンチの東に更に2m毎に幅1.2m、長さ2mのピットを21m延長して設定したが、造構、遺物ともにはほとんど検出されなかった。独立埋甕発見地点が遺跡の東の限界と推定される。

第Ⅱ章 遺構

1. 住居址

第1号住居址

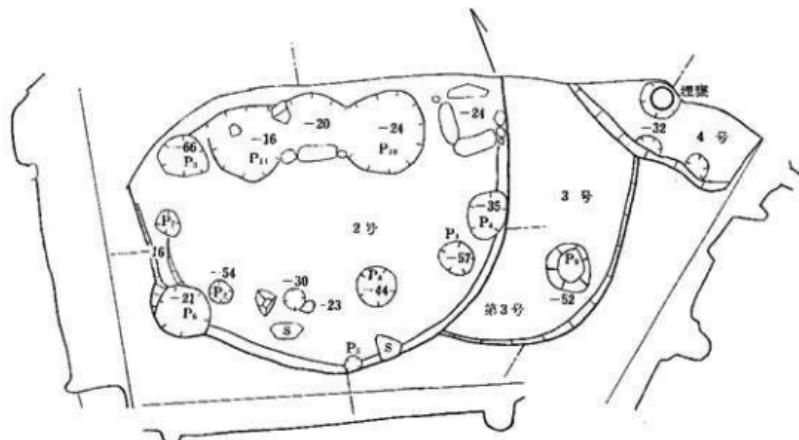


第4図 第1号住居址 (80分の1)

石囲炉址のある北半分を調査することができた。平面形は径4.8mの隅丸方形で、主柱址と推定されるP1・P2の他、西側の周溝により結ばれるP4・P5がある。深さはP1が60cm、P2は61cm、P3はP2に付随する10cmの浅い円形のピット、P4は30cm、P5は50cm、P6・P7は東側の周溝に連なる小ピットである。床面は平らで堅く、周溝をめぐらす。壁は約40cmで直壁に近い。径約1mの方形石囲炉で、4個の石をもって囲む。炉底は比較的浅く、断折した2個の石が転落遺存する。出土品は断面三角形の凹石1点が炉に接して遺存し、他は打石斧1、磨石斧1と土器破片である。(第19図1~3、第20図2~10、第26図8・10)

第2号住居址

東半分は第3号住居址と重複し、2号址床面より5cm上に第3号址の張り床がみられた。調査し



第5図 第2号・3号・4号住居址(80分の1)

得た南半分から、径5.3mの円形住居址と推定される。床面は平らで堅く、周溝は全周し、幅12cm、深さ15cmで、P6・P7をつなぐ部分は幅が30cmと広くなる。炉址は方形の石畳炉と推定されるが、焚口の炉石を残して三方は抜き取られる。炉の両側に円形の深いピットが掘られている。第3号住居址との重複の状態や炉石遺存状況から、第2号址の炉石が第3号址炉に転用された可能性がある。床面には第3号址と重複する故か、ピットが多い。P1・P2・P3は深さがそれぞれ57cm、54cm、66cmと深く、第2号址の主柱穴と思われる。P4・P5・P6・P7は周溝に接続するピットで、周溝に関連する特殊な施設とも考えられる。P8はその位置からP9に対応する第3号址の柱穴であろう。炉址両側の深いピットの用途は不明である。覆土からの土器破片の出土は比較的多かったが、床面遺物は少なく、P6とP8の中間から人頭大の縁泥片岩の原石、石皿断片、角柱状砾石様石が出土した。

第3号住居址

西半分は第2号址上に、東の一部を第4号址上に張り床した住居址で、南半分を調査し得た。床面は凹凸が多く軟弱で、周溝はない。南東の壁の高さは15~26cmで、径約4.3mの円形住居址である。炉址は方形の石畳炉で、東側の炉石が抜き取られている。床面は第4号址より20cm、第2号址

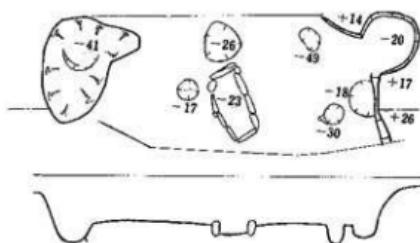
より5cm高い。P8・P9が南側の主住居であろう。出土遺物は器形の窺知できるもの3点（第19図2.3.4）の他、打石斧2、凹石等である。

第4号住居址

埋甕の遺存する南西部分を僅かに調査し得るに止まった。第3号址より20cm低いレベルの床面で凹凸が多い。周溝は幅15~20cm、深さ20cmで、これに接続する深さ約20cmのピットが2個所検出された。埋甕は口縁を床面とほぼ平らにし、底脚部は欠陥する。

第5号住居址

出荷期を控えたりんどう畑の中の住居址のため、中央部を調査し得たのみである。床面は凹凸が多く

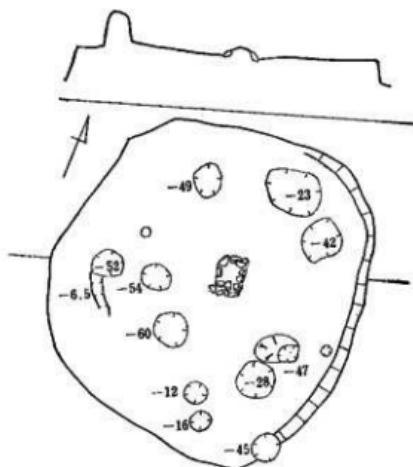


第6図 第5号住居址 (80分の1)

く、やや軟弱である。高さ17cmの東壁を確認することができた。東壁に深さ20cmの円形のピットが、また西側に深さ41cmの不整形のピットがあるが、この住居址に付随するものかどうか明らかでない。床面にも5個所のピットが検出された。炉は南北の長さ100cm、東西幅47cmの長方形の石窯炉である。磨石斧2、打石斧2と、復原可能の土器4点が出土した。（第17図、第25図1・2・13・14）

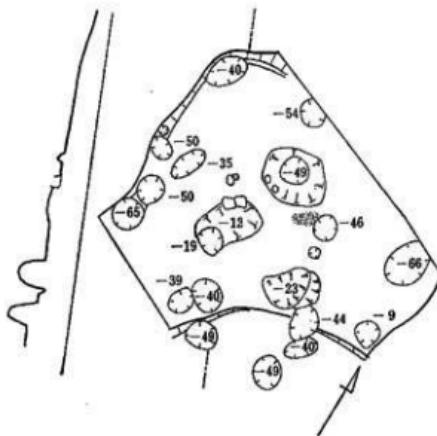
第6号住居址

北側は第7号址の張り床が重複し、南および西は作物のため調査不可能であった。高さ30~40cmの東壁のみ検出された。床面は堅く平らで周溝はない。炉址は小型の石窯炉で、15個の礫石で囲み、南側は礫石を二列に配す。炉の深さは11cm、南北56cm、東西43cmの長方形を呈す。床面にピット



第7図 第6号住居址 (80分の1)

が多く、どれが主住址か決め難い。炉址の東側覆土に遺物が多く、土器片の他、遠州式磨石斧1点、打石斧13点、石匙1点が出土した。(第15図、第16図、第25図3・15~20、第26図21~26・37)



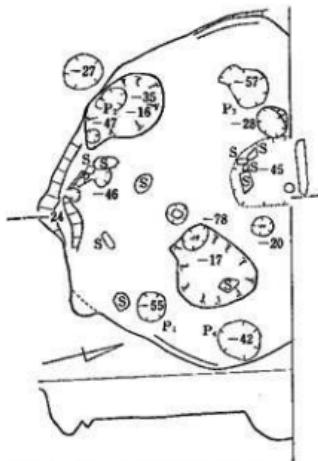
第8図 第7号住居址 (80分の1)

第7号住居址

南の部分を第6号址の上に15cm張り床して構築された住居址で、北側は調査できなかった。床面は堅く中央炉址にむかってやや傾斜する。炉址は炉石2個を残して抜き取られているが、掘り込みの状態から長方形の石囲炉と推定される。周溝は北壁裾に僅かに残っている。床面にピットが多く、炉址の東に焼土が堆積する。床上から磨り切磨石斧と打石斧1点が出土した。(第18図、第25図4・7 第26図27)

第8号住居址

りんどう畑のため炉址から南半分をようやく調査し得た。第5号址の東2.5mに位置し、径約5mの円形住居址である。壁は約15cm、周溝は断続して部分的にある。床面は軟弱で凹凸が多い。南壁裾

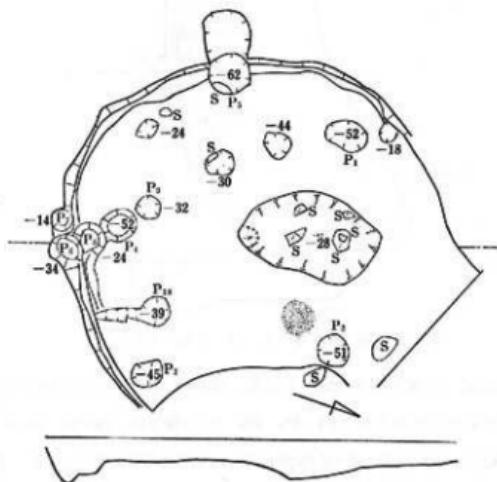


第9図 第8号住居址(80分の1)

は周溝が深さ24cmのピットとなり、他のピットと溝により連絡する。また溝の片側に鉄平石が縦に埋められている。床面はこれにむかって緩く傾斜する。炉址は三方の炉石が抜き取られ、深さ45cmの豊穴として残るが、径約1mの方形石囲炉と推定される。炉内南側に小石4個が転落遺存する。位置および深さからP1・P2・P3・P4が主柱址であろう。北側未発掘の柱址を2個所想定して6主柱址と考えられる。炉址の覆土上から深鉢形土器1点が、覆土より完形の小型浅鉢が出土し、完形磨石斧1点が床面から検出された。(第18図、第25図6、第26図28~31)

第9号住居址

既設の南北に通ずる農道東側の畑に発見された住居址で、東部分を第10号址に張り床して重複する。北部分が僅かに畦畔により切り取られていたが、床面がほぼ完全に検出された。径5.6mの円形住居址で、床面は堅く平らで、第10号址上の張り床も極めて堅く叩きかためられていた。張り床の

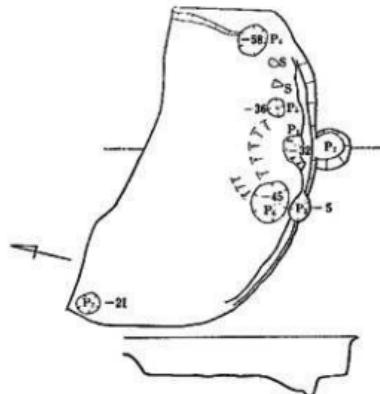


第10図 第9号住居址(80分の1)

厚さは13cmである。壁の高さは20~30cmで周溝は全周する。炉址は炉石が撤去されて、深さ28cmの長椭円形の窪穴として残り、4個の石が覆土上に土器片と共に遺存した。床面のピットが多く、深さ位置からP1・P2・P3・P4・P5が主柱址と推定される。南壁に張り出して作られたピットと、これに連続する周溝やピットは特殊の施設であろう。P6・P7・P8は相接し、P6・P7は周溝外に、P8は周溝内に位置するが、共に周溝と接続し、周溝はピットに接して次第に深く、P8は2条の周溝と接続している。床面はこの施設にむかって緩く傾斜する。P6の深さは34cm、P7 14cm、P8 24cm、周溝の深さは16cmである。P10は深さ14cmの溝が周溝と接続する。小型土器1と破片、打石斧2点が出土した。(第22図、第26図32・33)

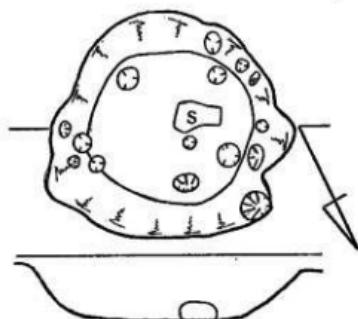
第10号住居址

床面の西部分は第9号址の張り床下になっており、東と北は土手により切り取られて欠除する。円形の住居址で、壁は南側で40cm、床面は堅く平らである。南壁に張り出してピットが設けられ、周



第11図 第10号住居址(80分の1)

溝はこれに接するにしたがって深くなり32cmである。床面はこのピットにむかって傾斜する。P2の床は住居址床面と同一レベルであるが、P4・P5・P6・P7の深さは、58cm、36cm、45cm、21cmである。P4・P5は主柱址と思われる。P4から深さ13cmの溝が北にのびている。遺物は少ない。(第22図)



第12図 ピット1号(20分の1)

2. 特殊遺構

ピット1号

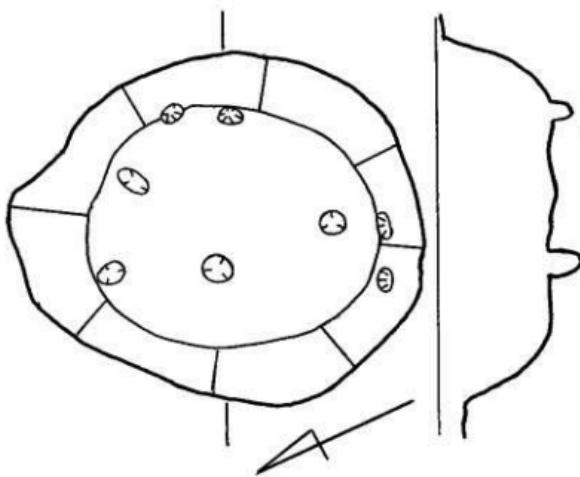
第7号住居址の西9.5m離れて発見された。径80cm、深さ19cmの不整円形の浅いピットで底部はほぼ平らである。径5~8cm、深さ12~15cmの小穴が底部に9個、壁に9個穿たれていた。覆土から炭屑が検出され、底部に小石が1個遺存した。

ピット2号

ピット1号の西5mにあり、北半分を調査し得た。1号と同型態のピットで、径95cm、深さ22cm底部に不規則な小孔と、石が1個遺存した。

ピット3号

ピット2号の西3mにあり、径80cm、深さ30cmの不整円形を呈する。底部に径5~8cmの小孔



第13図 ピット3号(20分の1)

6個が穿たれている。覆土より石錐1点と、縄文後期の無文土器1個体分の破片が堆積して出土した。

ピット4号

発掘区域西端の畝に発見された。連続する2個の円形ピットで、東側は浅く径45cm、深さ36cmで、底部に小孔2個がある。西側は径36~38cmのはば円形で深さ63cm。遺物は検出されなかつた。

独立土器

第9・10号住居址の東の畝のトレンチに発見された。地表下73cmのローム面に、口縁部と底部の欠けた土器を、上端2cmをローム上面に残して埋められていた。阿玉台式に比定される土器である。

第Ⅳ章 遺 物

1. 土 器

今回、中ッ原遺跡から出土した土器は大部分が掘文中期の土器であるが、前期木島式に比定される小破片と、若干の後期土器が検出された。中期の土器は第1号址、第8号址を除いては重複した住居址で、かつ各住居址ともに完掘が不可能であったため完形土器も少なく、各住居址の土器群を明確に把握し難い感がある。したがって確実に遺構と関連する資料に主眼をおいて、住居址別に記述を進めていきたいと思う。

東第3区出土土器（第14図1・2）

1は東第3区から単独で発見されたものである。深い切り込みのある山型口縁の浅鉢で、色調は暗赤褐色を呈し、雲母の微粒をかなり含有する。器内面の口縁部に沿って平行連続爪形文を、山型部の切り込み下に爪形文による円形文を施文する。簡潔であるが洗練された文様構成である。

2はローム層中の独立埋甕である。暗褐色を呈し焼成は余りよくない。隆帯とこれに沿う列点状連続刺突文により胴部を区画し、区画内を縱・横・斜めに平行連続刺突文により充填する。1・2共に阿玉台式に比定される中期前半の土器である。

第6号住居址出土土器（第15図、第16図）

勝坂式に比定される中期最盛期の土器である。この期の住居址は炉に小石を用いた小型石甕炉に特徴がみられる。1は大甕の大破片で、口縁部の隆帯には繩文が、胴部の隆帯には刻目が施される。

2は口縁部の形態が不明であるが、胎土に雲母を多量に含有する。繩文に竹管による波状沈線文を懸垂する。3は胸部に抽象的な区画文のある破片で、口縁は内屈する。16は円形擦消繩文を施し、器内外面に樹脂様の黒色塗料と丹彩が施されている。第14図3・4は西第3区のトレンチから検出されたものである。

第5号住居址出土土器（第17図）

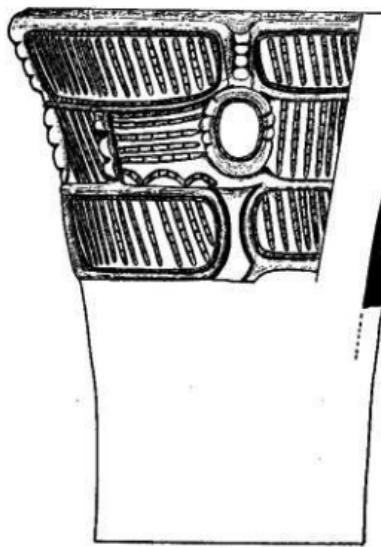
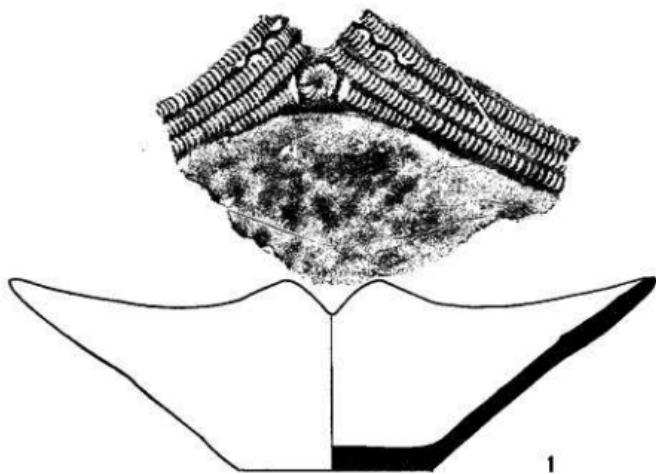
中期末葉前半に位置する土器で、この期の住居址は炉址が長方形となる。1は床面から出土した土器で、抽象的な奇麗な装飾が施されている。器形は内湾する變形土器で、口縁を4個の波状と2個の突起を対称的に組み合わせて飾る。胸部は粘土紐文と竹管連続刺突文により「踊る人」のごとき、また鼈虫類様の抽象文で、多くに呪術的な要素の濃い土器である。2・3・4が復原された土器で、他にかなりの量の破片が出土した。5は粘土紐を渦巻状に巻き上げた把手、14は後半に盛行するX字状把手の粗形である。

第7号住居址出土土器（第18図）

この住居址の炉石は撤去されていたが、堅穴の状態から長方形の石窯炉と推定されるが、出土の土器からみると第5号址より若干後出のものと思われる。16は、口縁部を隆起線で区画して縦の太い沈線を充填した4個の立体的把手を加飾し、胸部は太い沈線による綾衫状文が施される。

第2号・3号・4号住居址出土土器（第19図、第21図）

第3号住居址が第2号址の半分、第1号址の一部に張り床して重複していたために、遺物も混在しており、特に第2号址は第3号址構築の際に搅乱を受けたものと推定され、器形の判る土器は検出されなかった。この3基の住居址の中では4号址が最も古く、1の埋甕からもそれが窺われる。無頬甕で、胸部の隆起線の渦文・懸垂文の間を太く短い綾衫状・縦状に沈線で填めている。第2号址覆土出土の土器片とされるものは第21図4~20であるが、第3号址の土器との混在はまぬがれ得ない。遺構の状況から2号址廃絶後余り間を置かなくて3号址が構築され、2号址の炉石を3号址の炉石に転用したもののように推定される。3号址出土の土器は第19図2~10である。2は円形の孔のある山型口縁で飾り、胸部は隆線の間を太い沈線で填めている。4は小形の土器で、その文様構成は2と共に4号址の埋甕の要素を備えている。3の土器と拓影はその文様が更に簡素化され、3は胸部を太い沈線による渦文と縦状文で区画し、その間を細い斜行状線を施す。第20図1はピット2号ちかくか



第14図 東第3区出土土器実測図及び拓影（3分の1）



第15図 第6号住居址出土土器拓影（3分の1）



第16図 第6号住居址出土土器拓影（3分の1）

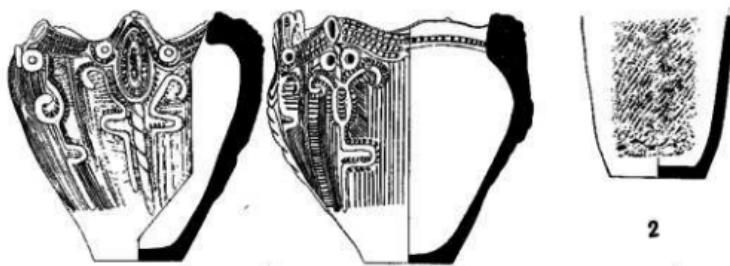
ら出土したものであるが、ほぼ同時期のものといえよう。

第8号住居址出土土器（第18図）

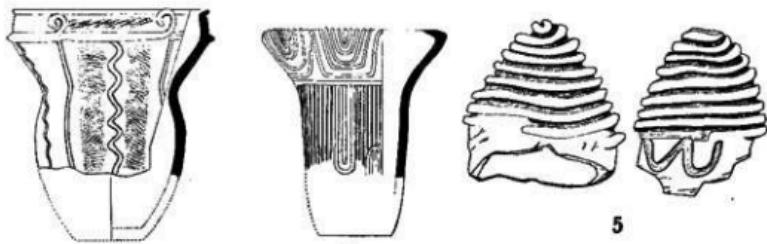
第3号址とはほぼ時期を同じくする土器で、1・2が完形の土器である。2は小型で、色調は灰褐色を呈し、焼成は極めて良好である。口縁に斜めの刻目状の沈線を施す。底部に火熱により黒く変色している。

第1号住居址出土土器（第20図2~11、第21図1~3）

2はX字状把手で、竹管平行浮線文に、波状の浮蔭文が貼付される。3の擦消繩文は後期的な要素を帯びている。4・7・8・9は口縁部破片で、渦状縦帶文の変化したもの、6・9・10は山型の縱列沈



2

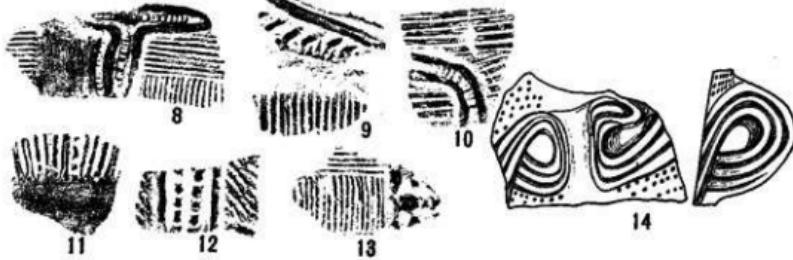


5



6

7



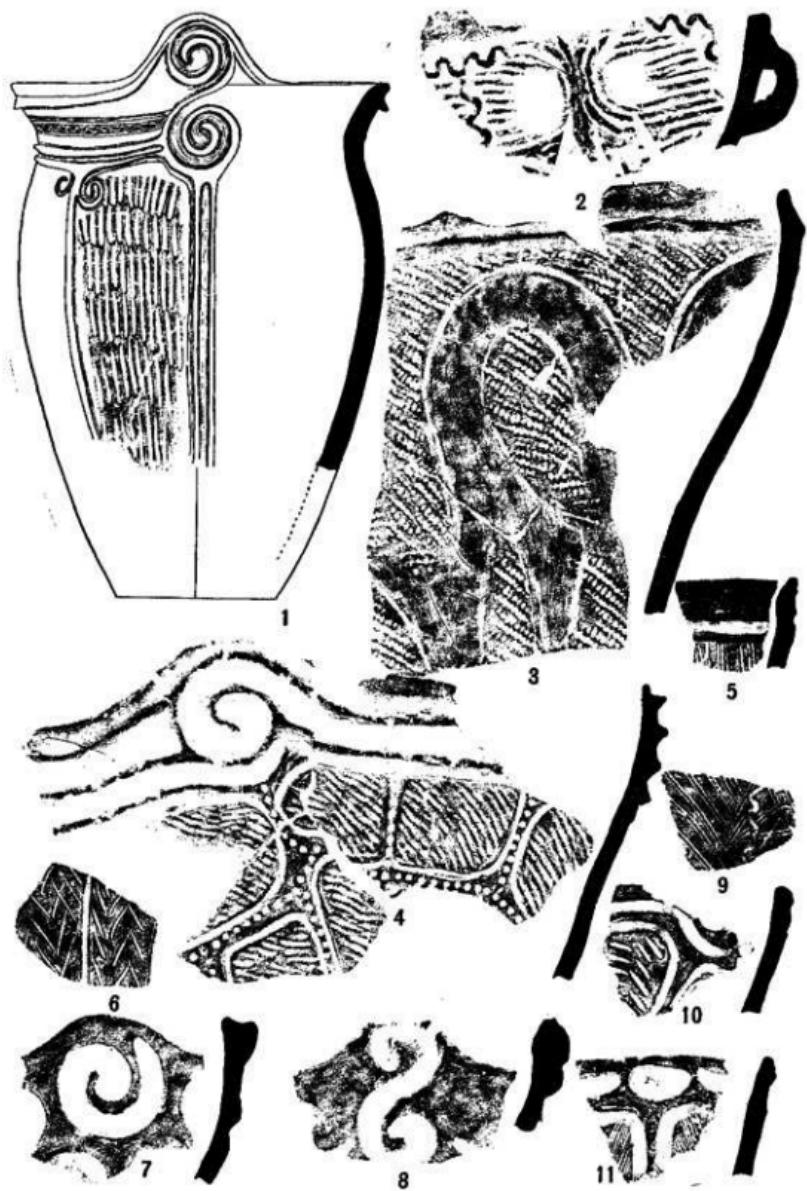
第17図 第5号住岩址出土土器実測図及び拓影 (1~4 6分の1, 5~14 3分の1)



第18図 第7号・8号住居址出土土器実測図および拓影 (3分の1, 16 6分の1)



第19図 第3号・4号住居址出土土器実測図及び拓影 (1~3 6分の1, 4~10 3分の1)



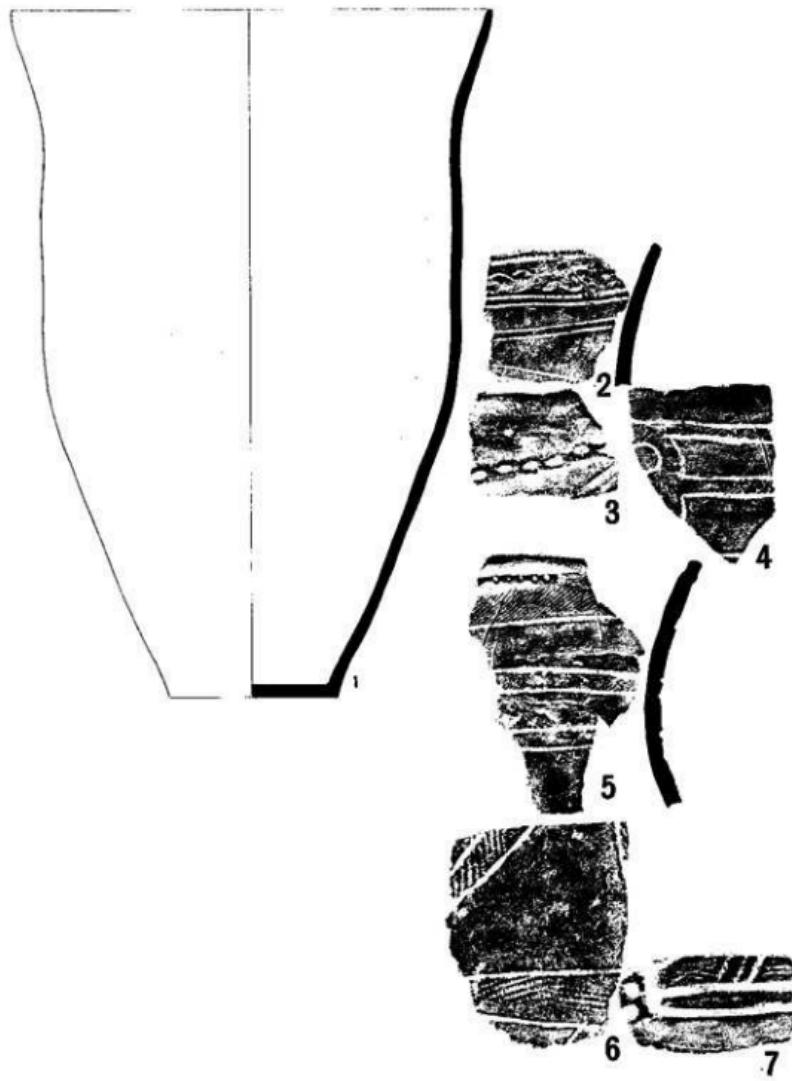
第20図 第1号住居址出土土器拓影（3分の1）



第21図 第1号・2号住居址出土土器拓影 (3分の1)



第22図 第9号・10号住居址出土土器拓影（3分の1）



第23図 震文後期土器実測図及び拓影 (1 6分の1, 2~6 3分の1)

縞文土器片である。これらは縞文中期終末期に編年される土器群で、中ヶ原遺跡においても中期最終末に編年される。またこの期の住居址は炉址が大型の方形石圍炉となる。

第9号・10号住居址出土土器（第21図）

10号址上に9号址の床面が張り床されていた。出土遺物は共に少なく、1~16が第9号、17~28が第10号から検出された。文様からみる限りでは時期的な差はほとんど感じられない。また住居址の構造も似ており、10号廃絶後、余り時を経ずして9号が構築されたものであろう。第2号・3号住居址と同時期のものであろう。

縞文後期の土器（第23図）

西第1区上層、西第3区より検出された。1はピット3号の覆土中に堆積していた無文土器で、口径34cm、高さ46cm、明るい褐色を呈し、器厚4mmで焼成は余りよくない。口縁部が外反し、胴部のふくらみは少ない。2~7は堀之内Ⅱ式に比定されるものである。

2. 石 器

石 鍔 8点出土した。1は第6号址床上より検出されたもので、黄褐色を呈する頁岩製、刃部は両面を加撃剝離して作成する。2は西第3区トレンチ出土、薄い石鍔で黄褐色頁岩製。3は東第2区トレンチ出土、灰褐色を呈する頁岩で、刃は片面だけを加撃剝離している。4~5はつまみのない石匙状の石器である。7~8~9は東第1区の9号住居址西側のトレンチよりまとめて出土したもので、縞文前期に属する石匙である。7は黒色硅岩製で片刃、8は褐色を呈する硅岩で、両面全面に丹念な剝離調整を加える。9は黒曜石製で裏面はつまみの抉入部だけに調整が施される。

石 鐛 14は第5号址西のピット、17は第7号址、18~19は第9号址、他は各トレンチより検出された。14は調整は粗く、15は両側縁を鎌状に加工、17~18~19は三角鐵である。10は大型粗雑の三角鐵、11はポイント様の石器で、裏面に剝離面を残している。すべて黒曜石製である。

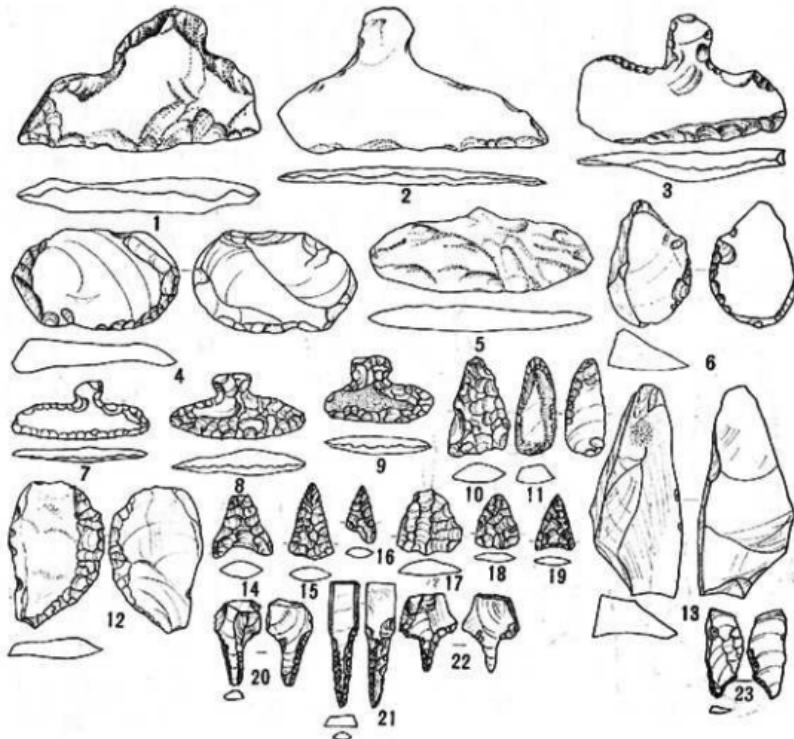
石 錐 黒曜石製のもの3点が検出された。20は第5号址西のピット、21は第9号址、22はピット3号出土である。2は調整丹念の精巧な石錐である。23は石錐様の石器で、第5号住居址より出土した。剝片の先端を僅かに加工している。

石小刀 6~12共に黒曜石製で、6は弧状の側縁を僅かに調整し、12はより丹念である。

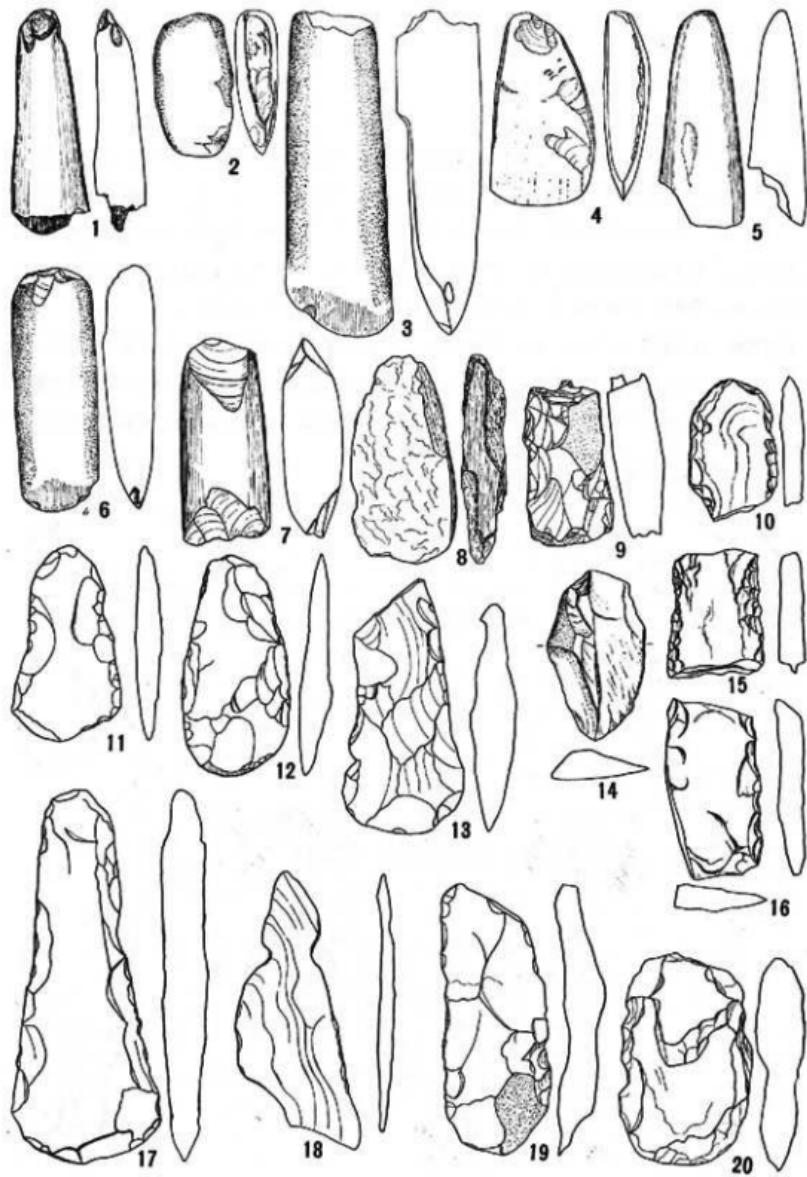
磨製石器 1~2は第5号址、3は第6号址、4~7は第7号址、6は第8号址、5は西第2区のト

レンチから 計 7 点が出土した。1は明るい褐色の頁岩質の石で、頂部に敲打痕と思われる剥離がある。2は青白色を呈する蛇紋岩で、両側縁と頂部を敲打して整形している。3は青灰色の硬砂岩製、刃は斜めにつけられ、裏面は刃部の方から剥離欠落した痕を再び研磨している。4は蛇紋岩で左側縁は磨り切り、右側縁は原石面を敲打して整形し、打撃の際に生じた剥離痕が両面に残っている。8は第1号址出土で僅かに研磨面を残して剥離しているが、火熱によるものであろう。

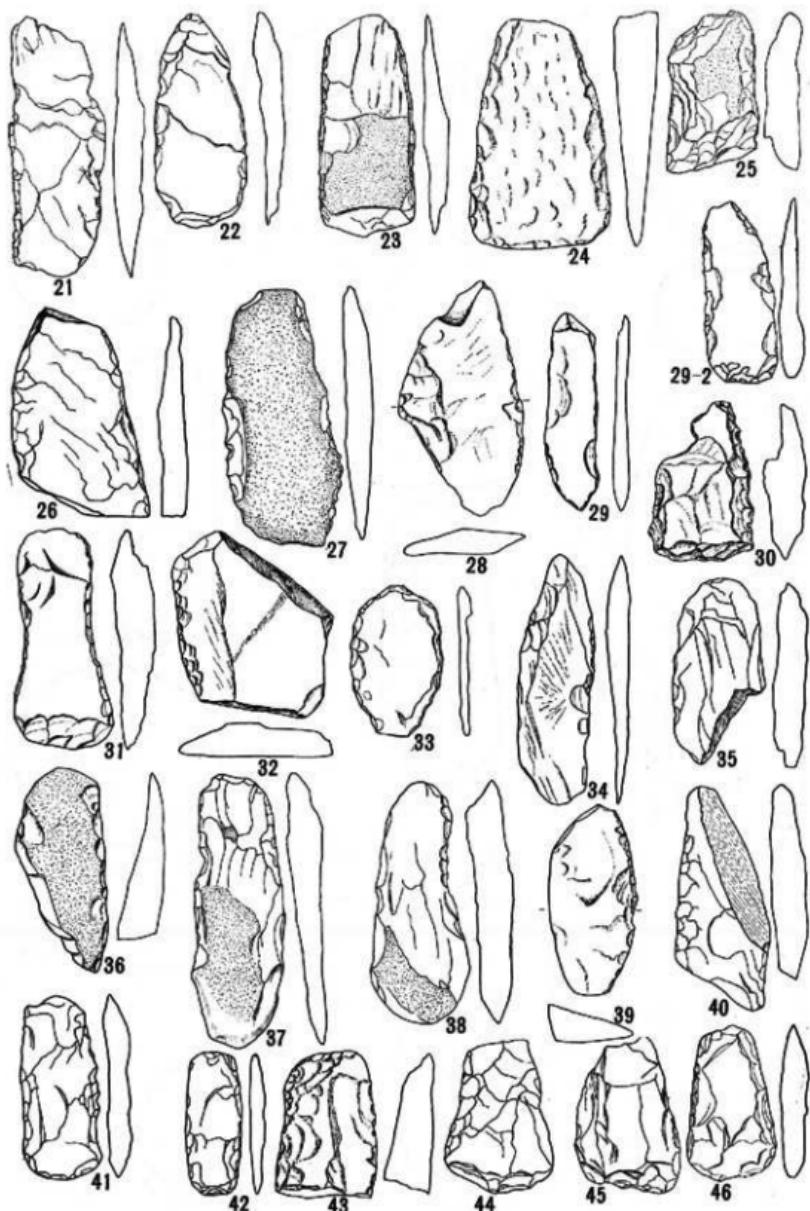
打製石斧 11は第1号址、10・12は第3号址、13・14は第5号址出土で、砂岩と頁岩製である。第6号址からは13点出土した。15~26・37がそれで、17は長さ 20cm の最大の石斧、18は黄褐色頁岩製で、抉入部を有する縦形石匙様石斧。37は緑泥片岩製で、刃部の両面に使用痕と思われる磨



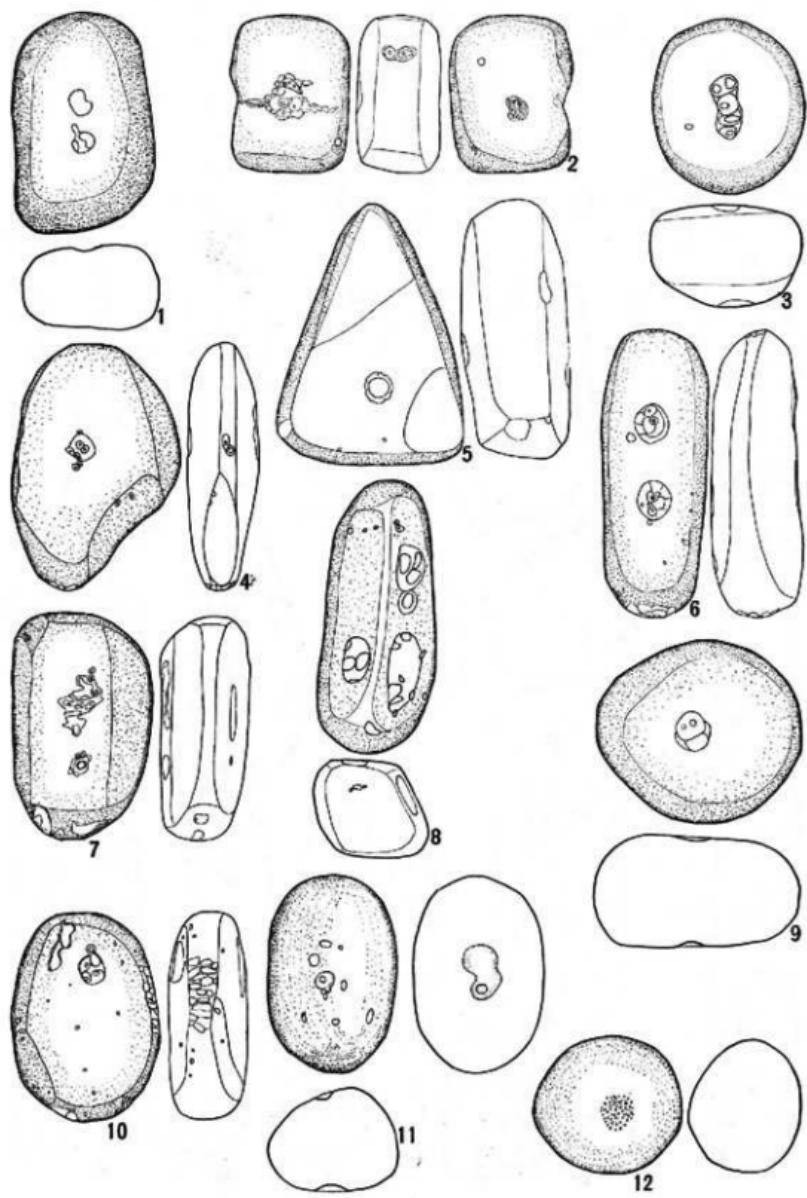
第24図 石器実測図(2分の1)



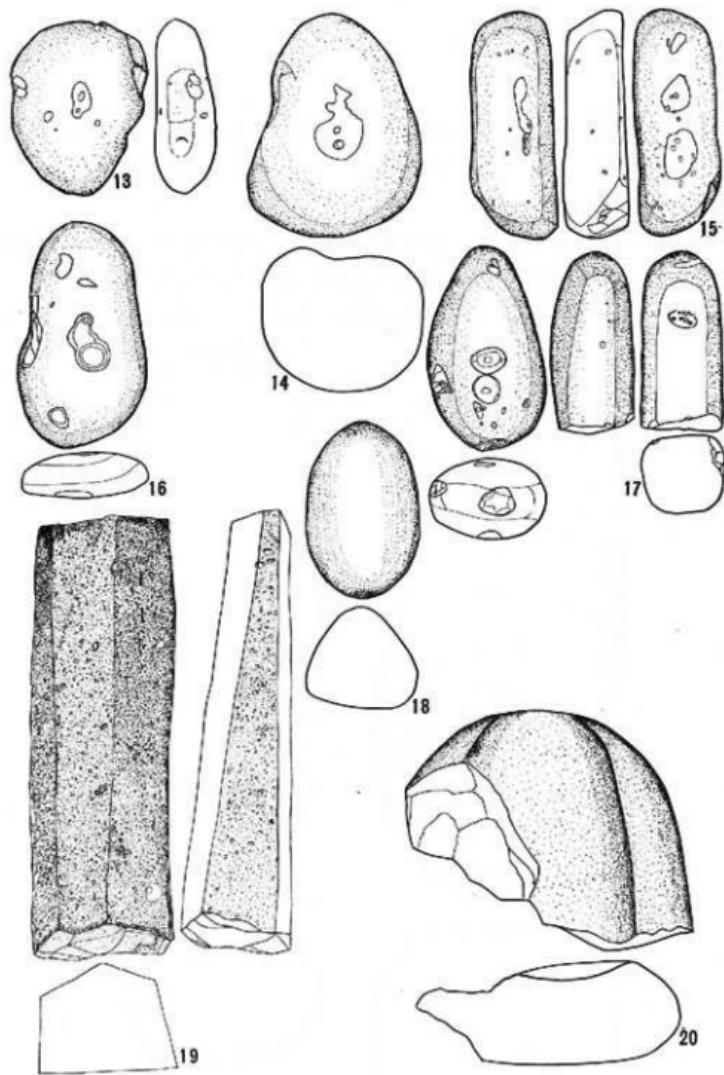
第25図 石器実測図(3分の1)



第26図 石器実測図(3分の1)



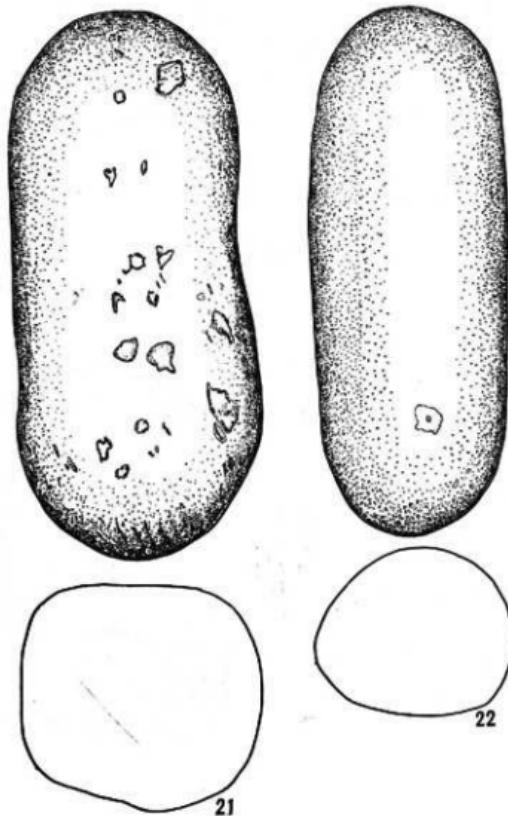
第27図 石器実測図(3分の1)



第28図 石器実測図(3分の1)

滅がみられる。8第号址から28~31の4点が出土した。28は左に打痕のある三角状の横長剣片で三
角状の頂部を加撃削取している。32・33は第9号址、34~46は各トレンチ出土である。
42は小形の縁泥片岩製である。

凹石・磨石　すべて安山岩製である。1は第2号址、2・3・5・7は第5号址、6は第6号址出土で
ある。片面を磨ったもの、両面に凹みのあるもの、片面のみのもの等に分類され、所謂石鰓形のもの
が多い。6・8は長橢円形のもので、6は両面共に2個所の盲孔があり、先端に敲打の痕跡を残す。12



第29図 石器実測図(3分の1)

は球形で一端に打痕があり、17は断面に二次的な打欠きがある。

その他の石器 19は第2号址のピット内より出土した。石質は安山岩で断面五角形で、五面共に研磨の痕がある。20は第2号址出土の石皿断欠品で、黒い炭化物が付着する。21は第1号址出土で、全面に磨痕が認められる。22は第3号址出土で、先端部に打痕が認められる。加工は余りないが石棒であろう。床面から出土した。

第V章 総括

今回の調査は、遺跡の台地頂部を東西に通ずる幅4mの道路敷だけの発掘という特殊な調査であった。したがって、住宅開発に伴うような大規模な遺跡破壊にはつながらなかった。しかし有料道路から入る農道開設であるため、将来も宅地開発が全く行なわれないという保障は全くないわけである。今回の発掘で知り得た遺跡の性格、規模が、遺跡の保存、活用の面に反映されるならば、また有意義な調査であったということができよう。

調査は西地区では遺跡の中央を、東地区では北縁を通る路線に、トレンチを設定して行なったが、遺跡の規模をほぼ把握することができた。すなわち、遺構の存在する区域は、西第1・第2・第3区、東第1・第2・第3区の東西の長さ約135m、南北の幅60mの台地平坦面から南斜面にかけてである。木島式および石匙等の資料から、縄文前期初頭に遡り、中期に最も繁栄して縄文後期まで続く重複遺跡である。縄文中期の住居址は、出土土器の型式や遺構および重複の状態から、少くとも五期に分けることが可能である。八ヶ岳西山麓の中期遺跡の有する性格を示し、集落構成を究明することのできる重要な遺跡の一つであるということができる。

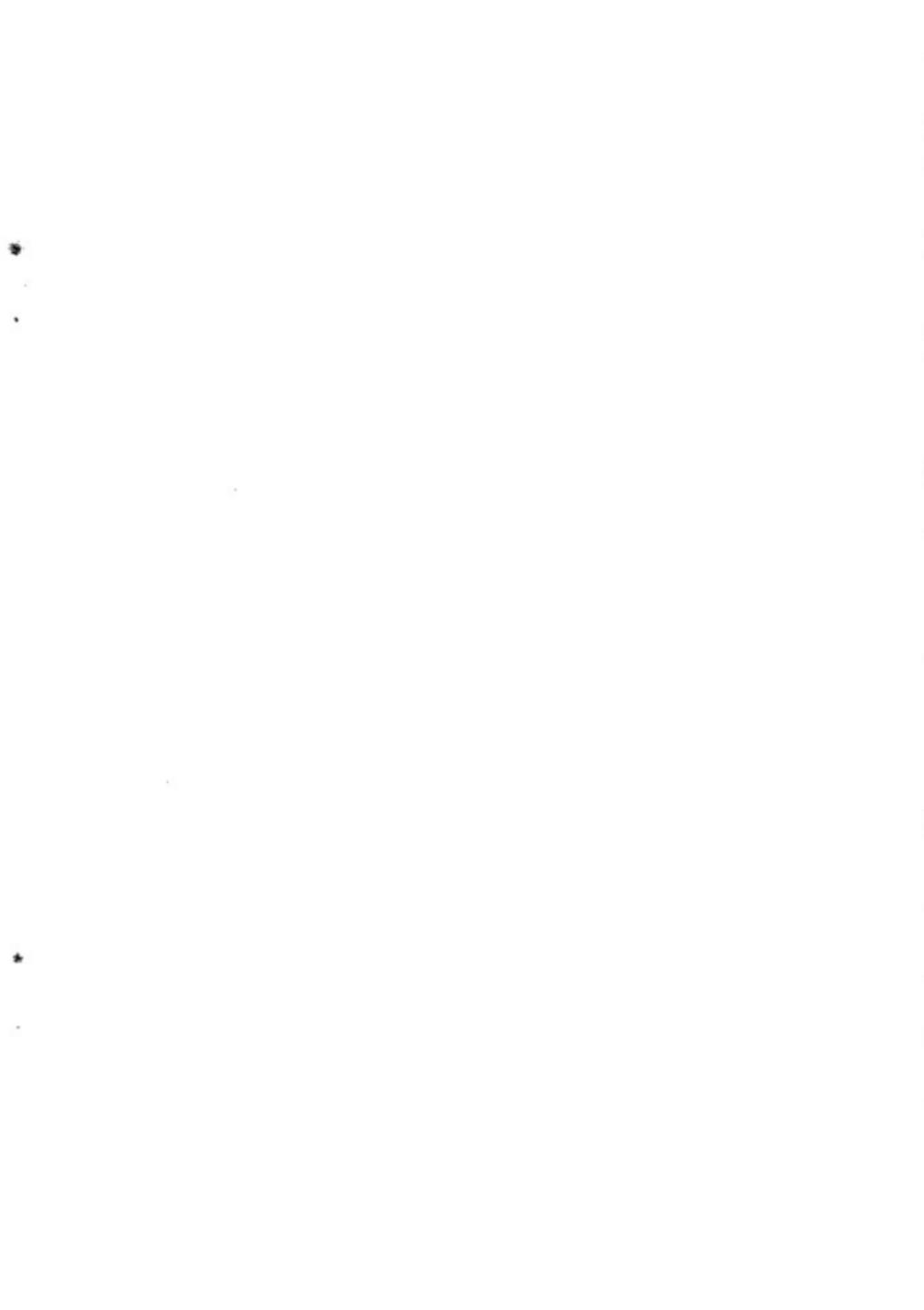
個々の住居址についてみると、8号・9号・10号の南側周溝につながる小堅穴は、余り例をみない特殊な遺構である。その在り方から貯蔵庫的な堅穴とは考え難い。むしろ排水のための遺構ではなかろうか。とすれば、中ッ原遺跡ではこの時期に、特殊な排水遺構を設けなければならないような自然条件があったものとも推定される。

天狗岳唐沢を水源とする角明川は、中ッ原遺跡上方3,000mの糸萱部落付近で、渋川に合流する。昔はこの角明川が氾濫すれば中ッ原の上方まで水を押し流したと伝えられ。事実、中ッ原遺跡東第3区の一部には褐色土層から黒土層下層には流水による砂礫の混在が確認された。のことから、これら周溝につながる堅穴は、排水のための一時的な遺構とも考えられる。

さて今回の発掘は、山口区全戸の奉仕協力のもとで行なわれたが、これもまた今回の調査の特徴で

ある。このことが遺跡保存にプラスされることを念ずるとともに、山口区長木村忠行氏をはじめ区民の皆様に心から感謝申し上げる次第である。

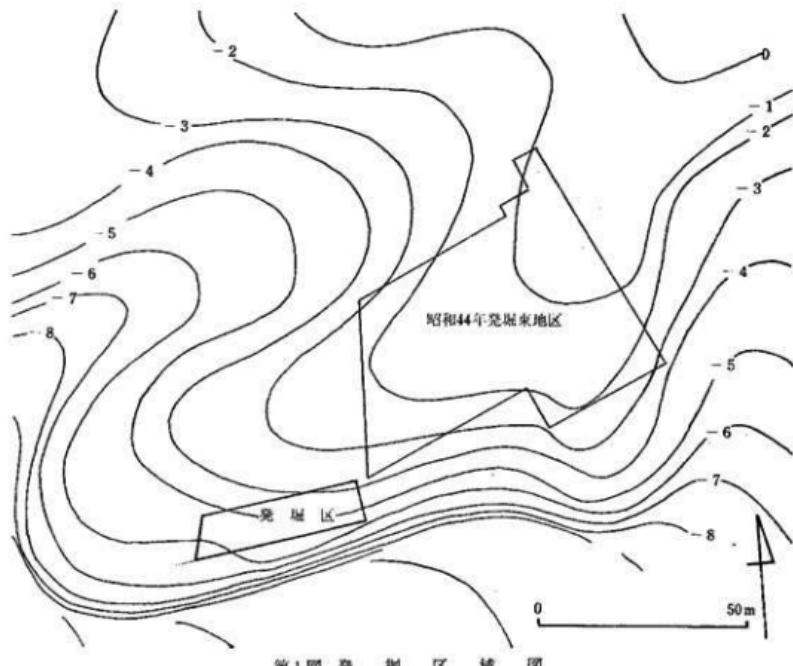
第2編 和 田 遺 跡



I はじめに

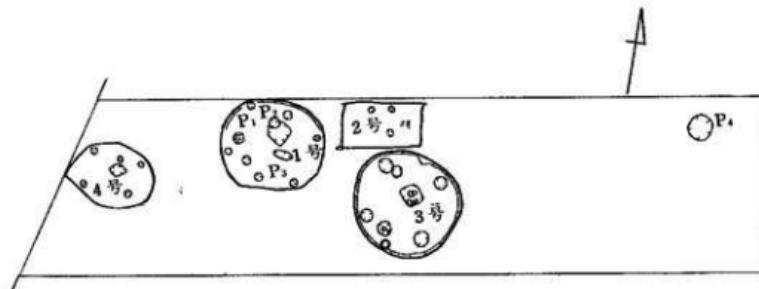
今回発掘した地点は、茅野市玉川小泉区の所在する台地の南斜面である。この台地は八ヶ岳西山麓に展開する一大扇状地の中央に、島状に孤立する小泉山（標高 1069.8m）西裾から舌状にのびる台地である。台地の小泉山裾に近い一帯に、かつて茅野和田遺跡が立地していた。昭和 44 年、県営住宅地として開発が行なわれ、現在は住宅が軒を並べて、昔日の面影はすっかり失われ、戸数 240 戸が茅野市行政区小泉区を構成している。

造成工事の前、昭和 44 年 10 月 27 日より 12 月 1 日まで緊急発掘調査が実施され、その詳細の報告書「茅野和田遺跡」が茅野市教育委員会より刊行されている。工事前の遺跡の地形は、台地中央にむ



第1図 発掘区域図

かって斜めに走る深い凹地により、東西の両台地に分断され、東台地は小舌状部を形成していた。西台地では約2,200m²が発掘調査され、縄文中期住居27、後期3、晩期1、土師式竪穴住居2のほか、小堅穴・独立土器等の特殊遺構40が検出された。また、東地区では台地頂部の平坦面を中心に約3,000m²が発掘され、縄文前期住居5、中期44、弥生時終末期住居5、特殊遺構27が検出された。



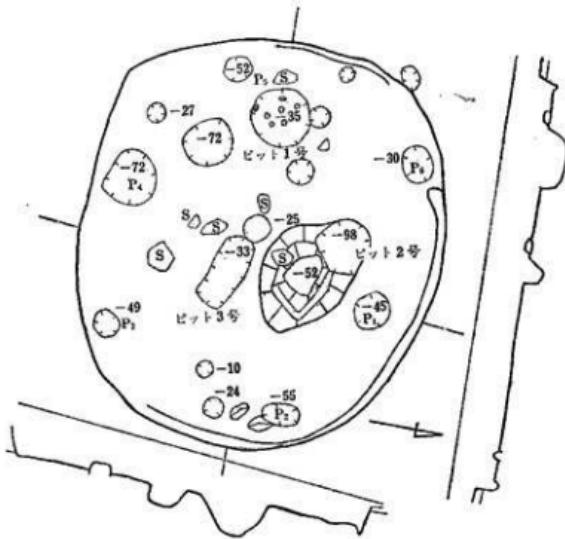
第2図 住居址配置図

しかし、この東台地の舌状部南斜面の一部が種々の事情から工事が遅れて原状のまま残されていた。たまたまこの区域にも若干の遺構が埋没していることが判明したため、昭和49年度茅野市教育委員会の文化財調査費に発掘費を計上して、長野県開発公社の同意を得、昭和49年10月2日から11月1日まで発掘調査を行なった。その結果、縄文中期竪穴住居3基と、弥生式時代住居址1基を検出調査することができた。

II 遺構

第1号住居址

南傾する斜面に構築され、北壁は約40cmであるが、南壁は欠陥する。東西径5.9m、南北径5.3mの平面形はやや梢円を呈する。北壁は直壁にちかく、幅10~15cm、深さ5~8cmの周溝をめぐらすが、南と西北部は欠陥している。床面は堅く、僅か南傾し、石が各所に遺存する。炉址は石が撤去されて方形の深い竪穴として残り、後に掘られたと推定される深いビットが炉の北部分を欠いている。炉址の壁に炉石を据えた段があり、形態から大型の方形石窯炉と推定される。径110cm、深さ54cmで底部は赤く焼けている。



第3図 第1号住居址 (80分の1)

主柱址と推定される P1～P6 の他に ピットが多いが、P7・P8・P9 は住居址とは別の特殊の遺構と思われる。炉址内覆土より 楕円形押型文土器片 2 点が検出されたが、この住居址に伴う遺物は少ない。

第1号住居址床面の遺構

ピット 1号

径約 90cm の円形の堅穴で、住居址床面からの深さは 33cm である。底部および壁に 7 個の小孔を有する。

ピット 2号

住居址炉址の北半分を欠損して掘りこまれた径 74cm、深さ 98cm の、平面形は隅九不整五角形を呈する。直壁に近く、底部の近くの壁に、足掛けと思われる段がつけられている。

ピット 3号

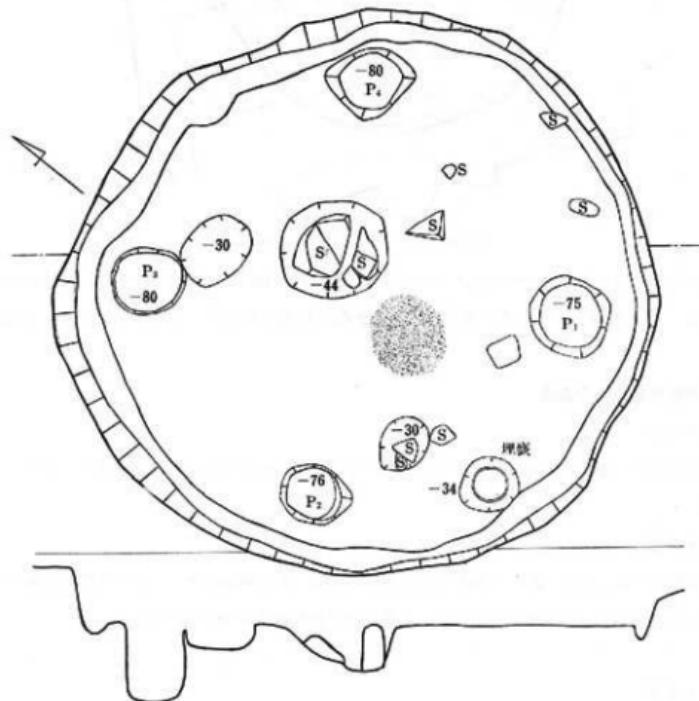
炉の南側にあり、長径 103cm、短径 46cm の長椭円形を呈し、床面からの深さは 32cm である。

第2号住居址

第1号址の東に接して発見された住居址で、南には第3号址が位置する。ローム層への掘り込みは浅く約6cmである。東西両壁のみ確認できた。床面は軟弱で、2個所に焼土が堆積し、5個所のピットと6個の砾石が遺存する。僅かに検出された弥生式土器片により、その時期が裏付けられた。東西4.5mの長方形住居址である。

第3号住居址

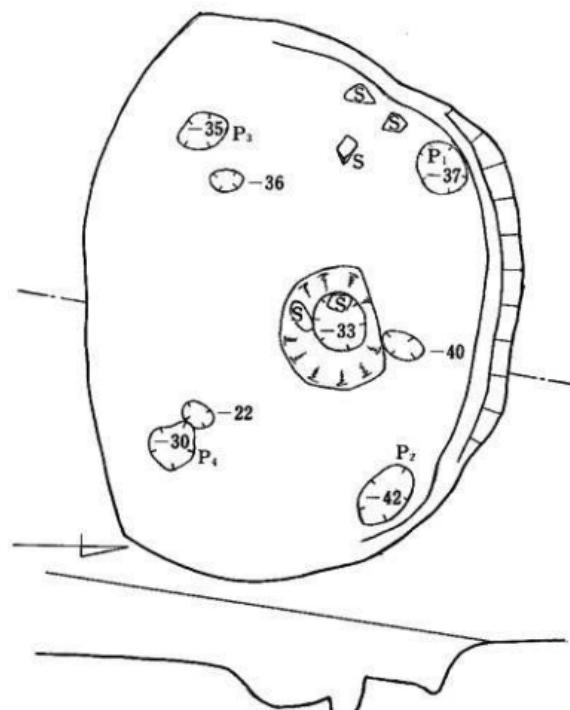
径6.2mの円形住居址で、ロームに深く掘り込まれ、規模も大きく縄文中期末葉の典型的な住居址



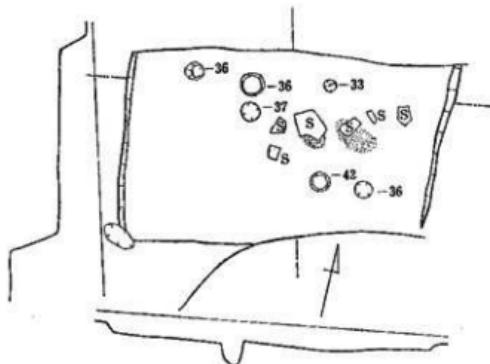
第4図 第3号住居址(80分の1)

である。床面は堅く、わずかに南に傾斜する。4主柱址で、柱穴は垂直に掘られて深く大きく、底は平らである。周溝は全周し、最大幅44cm、最深部42cmと幅広かつ深い。壁は地形に即して北壁50~70cm、南壁15cmである。炉址は中央より北に寄り、炉石は撤去されているが、竪穴の掘り込みから大型の方形石圓炉と推定される。炉内に火熱で焼けて断折した角柱状の石が転落遺存し、炉底は焼けて赤い。また炉の南側の床面が径1mの円形に焼けている。南側の主柱址間に周溝に接して埋甕が遺存した。底脚部の平らに欠損する土器を逆さに伏せ、底には鉄平石が敷かれていた。

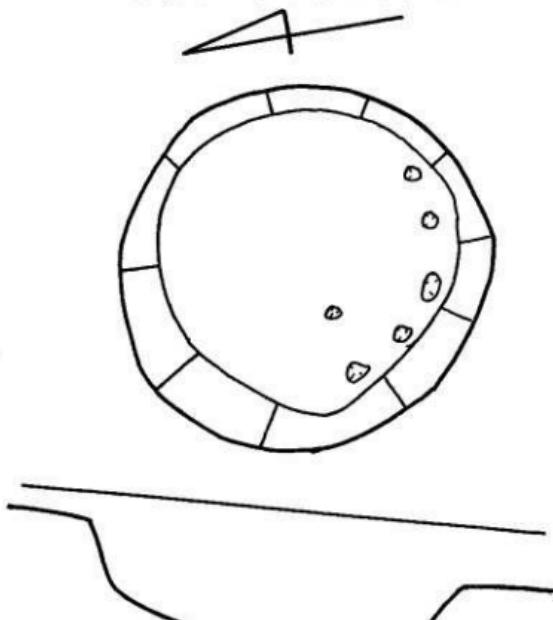
炉の南側の床上20~30cmの堆土中に土器が集中して出土し、完形に復原された土器は埋甕を含めて12点である。石器は少なく、黒曜石小刀1、石錐1、凹石、磨石8点である。



第5図 第4号住居址 (80分の1)



第6図 第2号住居址(80分の1)



第7図 ピット4号(20分の1)

第4号住居址

発掘区の西端に、道路に接して発見された。北壁の高さは50cmあるが、黒土層が薄く、かつ南傾する地形のため、床面の南半分は耕作により削られていたが、径約4.8cmの円形住居址と推定される。床面は凹凸が多く軟弱で、南に僅かに傾斜する。周溝は幅15cm、深さ8cmで、P1・P2は北側の主柱址であろう。炉址は石が撤去され、炉底は赤く焼けている。遺物は少なく、小型土器2点と破片、棒状の半磨製石斧の欠けたもの1点である。

ピット4号

発掘区の東端に発見された。径130cm、ローム面からの深さ37cmの平面形円形を呈する。南壁際に小孔が穿たれている。遺物は検出されなかった。

III 遺 物

1. 土 器

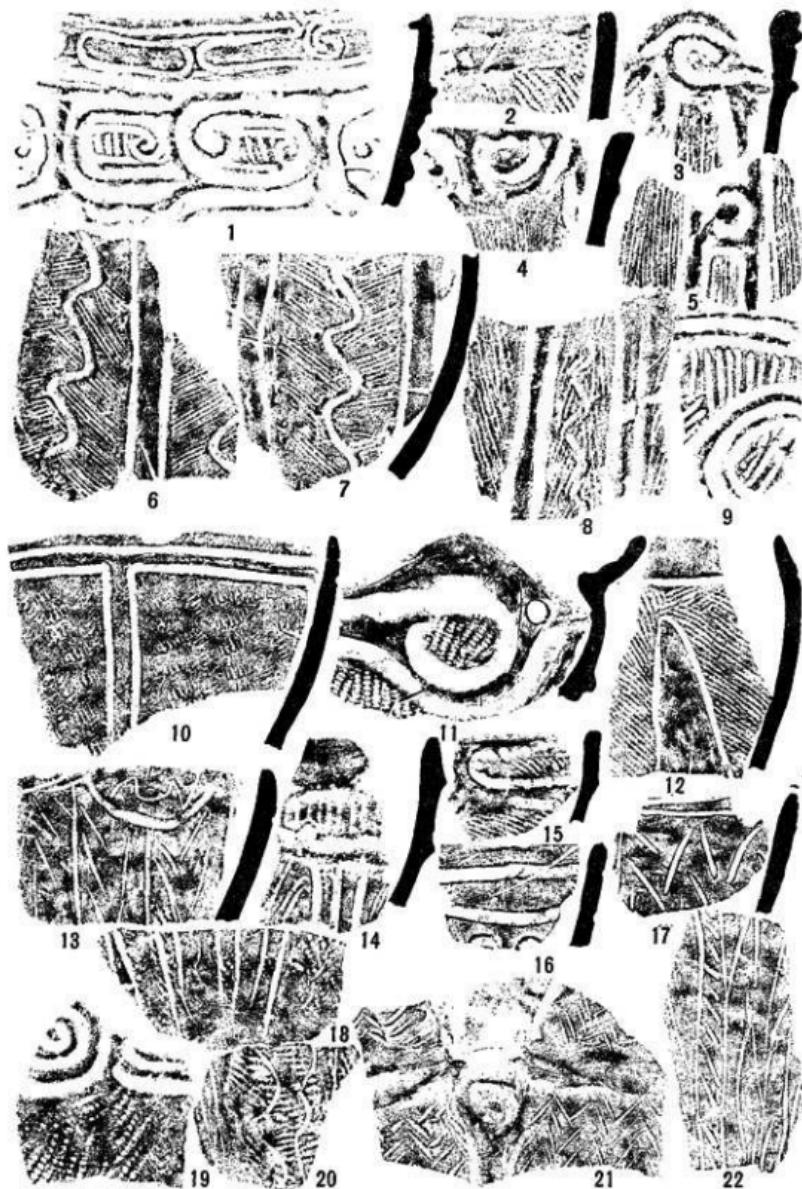
押型文土器

第1号住居址の炉址竪穴覆土中から破片2点が検出された。1は器厚8mmで色調赤褐色を呈する。胎土に細かな砂粒を含み焼成は良好である。紡錘形を呈した梢円押型文で、梢円は大きく、器形



第8図 梢円押型文土器拓影(拡大)

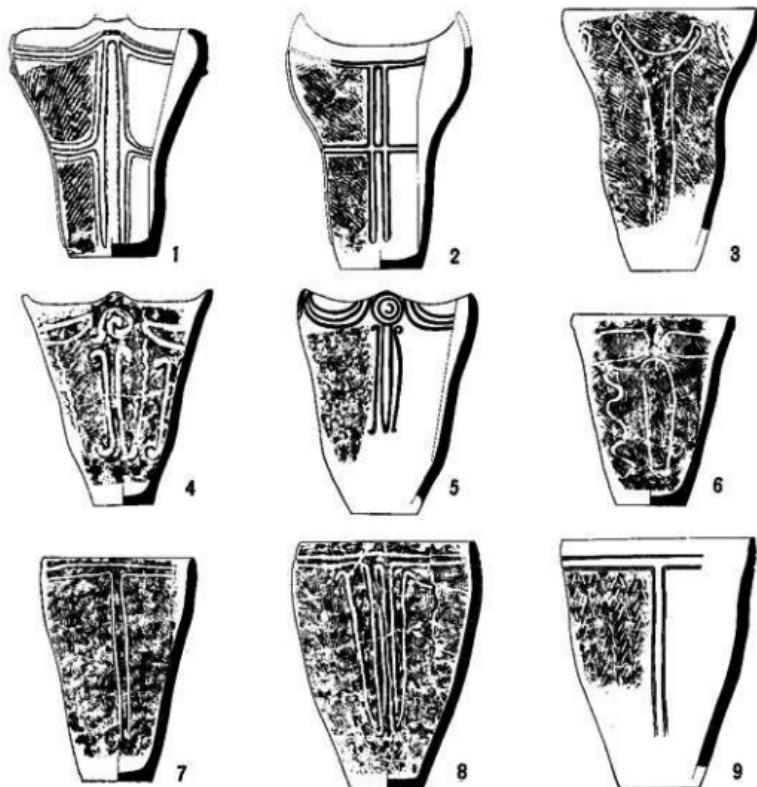
に対して綱位に押捺されている。2は色調褐色で、細かな砂粒を含み、厚さ7mm。梢円は粒状で中央が凹み、1の梢円より小さい。小破片なので器形に対する押捺の方向は判らない。



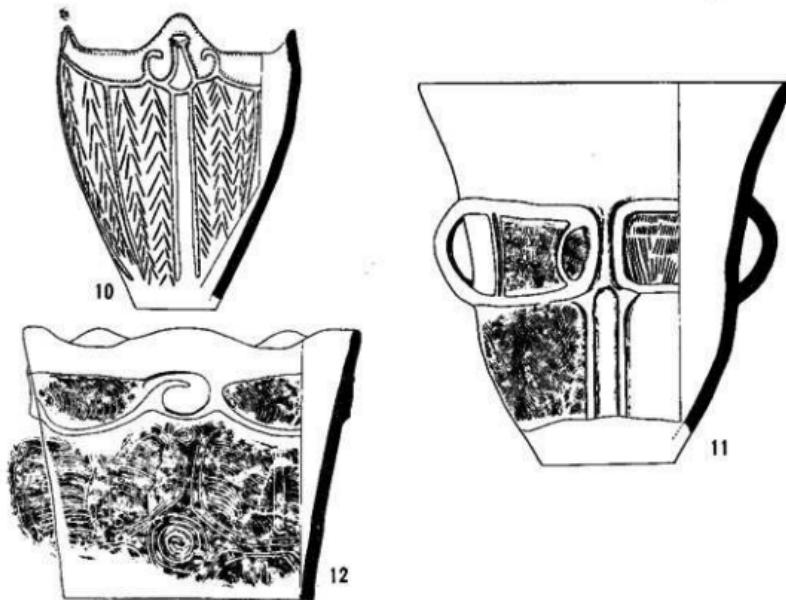
第9図 第1・第3号住居址出土土器拓影（3分の1）

第1号・4号住居址出土土器

完形土器ではなく、破片の量も少なかった。第1号址は1~9に示すものが代表的なものである。1~4・8の口縁部破片にみられるように中期終末期の前半、曾利II・III式に比定される土器である。第12図1・2は第4号住居址より出土したもので、無文丸底のミニチュア土器である。色調は暗褐色を呈し、施成は良い。その他の破片拓影にみられるように、第1号・4号住居址は同時期のものである。



第10図 第3号住居址出土土器実測図（6分の1）



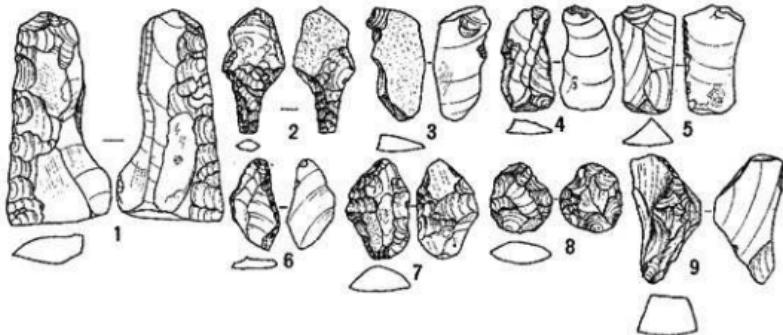
第11図 第3号住居址出土土器実測図(6分の1)

第3号住居址出土土器

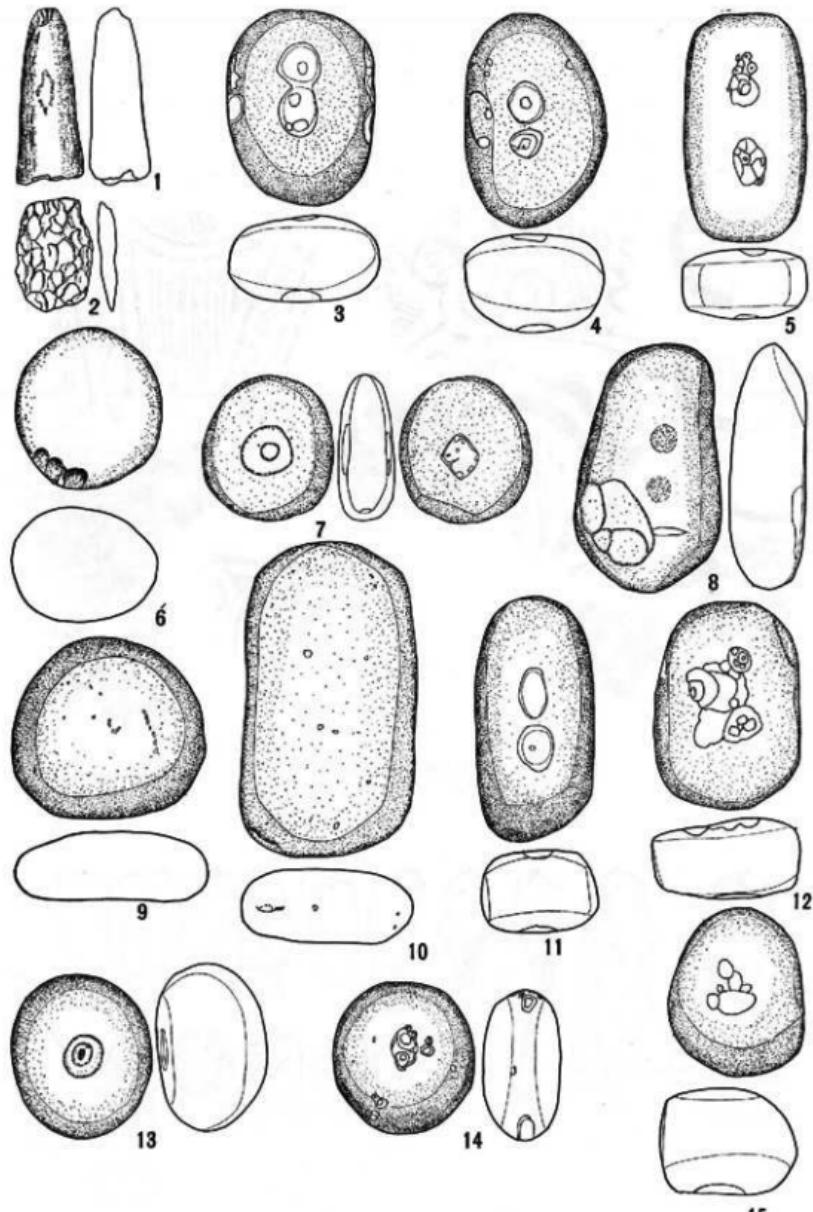
中期最終末期の土器で、完形に復原されたものが埋甕を含めて12点である。地文に縞文の施文されたものが3点あり、器形は深鉢で、副部から次第に開いて、口縁部が内弯する。1・2は口縁部をめぐる1条の隆線から胴部に2条の隆線を懸垂し、さらに胴部も1条の隆線で区画した同手法の土器である。口縁を対称的に2個所山型にしている。3は口縁の内弯がやや少なくなり太い沈線文が施されて、磨消縞文が行なわれている。4・5・6・7・8は太い沈線による曲線文と、条線または桿状工具による引搔文により、文様を構成したもので、口縁が外に開く深鉢型である。9・10はハの字の山型縦列文を地文とするものである。10は丸みのあるやわらかい隆線で口縁部および胴部を区画し、口縁と隆線に沿って列点文を施して変化を与えている。11は退化的のX字状把手付土器で、頸部のくびれがなくなり、胴部のふくらみも少なく、口縁が僅かに外反する。12は壇壠として使用されたものである。5個の山をもつ波状口縁で、退化した隆線の渦文を口縁部にめぐらし、胴部および隆線の渦文間に、自由奔放な沈線による渦巻文・曲線文が画かれている。



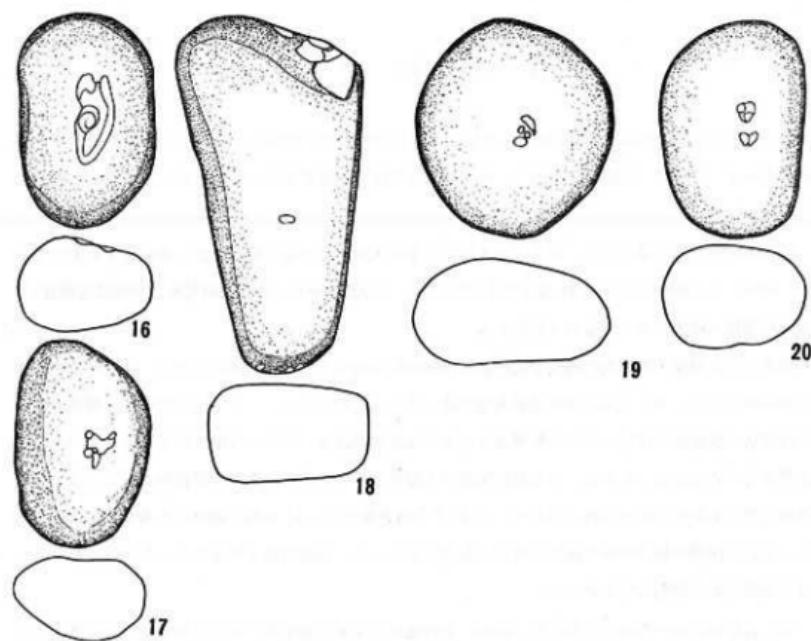
第12図 第4号住居址出土土器拓影（3分の1）



第13図 石器実測図（2分の1）



第14図 石器実測図(3分の1)



第15図 石器実測図(3分の1)

2. 石器

1~4は第3号住居址から出土した。1は漆黒の黒曜石製小刀で、長さ7.5cm、片側全縁に両面調整をして直線状の刃部を作出している。2は黒曜石製の石錐で、先端を折する。3・4は使用痕のある刃器状剝片である。5は第4号址出土の後の高い刃器状剝片で、片側縁に使用痕とみられる刃こぼれがある。6~9はトレーナーから出土した石器である。6は薄い刃器状剝片の断折した先端部で、右側縁に丹念な調整を主剥離面から加えている。7は裏面は平らで、真中の部分に両側から薄い剝離を加え、表面はほぼ全面に調整剝離を施している。8は両面に粗い剝離を施した円形の石器、9は先端から調整を加えている。

石斧の出土は少なく、磨石斧の折れたもの1点が第4号住居址から出土した。凹石は比較的に多く3・4・6・7が第1号址より、8・9・10・11・13・16が第2号址から出土した。

IV おわりに

今回発掘調査したのは、昭和44年に発掘した東台地中央平坦面から、南西にのびる小舌状部の南斜面 616m^2 である。住居址の発見により、集落は舌状部先端までひろがりをもっていたことが判明した。

縄文中期住居址3基のうち、第2・第3号址は中期末葉後半の第V期とした一群に属するものである。前回、この期の住居址が11基発見されている。この期に至り、住居址の規模、形態は定型化し、集落の規模も最大になったものと思われる。

第3号址は規模・形態共に縄文中期住居址の典型的な例である。型式的には2号・4号址と相違は認められないが、出土土器は中期最終末期に比定されるものである。そして出土状態が、埋葬を除いては住居址廃絶後に住居址外から放棄されたような状態にあり、はたして第3号址に伴うものか疑問を残すところである。しかし、中期最終末期の土器セットを示すものとして好資料といえよう。3基の住居址ともも炉石が撤去されていたが、これは全回発掘された11基の住居址にもみられた傾向である。後世の開墾や耕作の際に抜きとられたものもあるが、石器の出土の少なかったことと共に、一つの特徴として指摘しておきたい。

弥生式住居址が一基検出されたが、前回、東台地から5基の弥生式住居址が発見されており、八ヶ岳西山麓においては、弥生時代末期には少なくとも数戸が一つの集落を形成して稻作が行われたものと思われる。

椭円押型文土器破片が2点検出され、この台地が生活の場として利用したのは早期にまで遡ることを明らかにした。

おわりに、発掘に参加協力された下記の皆様に心から感謝申し上げる次第である。

牛山供吉・宮坂きよめ・牛山久子・牛山ます・小林しま・田中君子・牛山つかね・牛山てる・牛山佐一・岩波ふじよ・宮坂さつき・柳沢たかの

中ッ原遺跡



中ッ原遺跡全景



第1号住居址



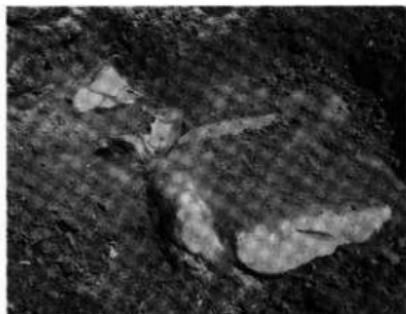
第1号住居址石囲炉



第2号住居址



第3号住居址石囲炉



第3号住居址石圓炉と土器出土状態



第2号住居址、第3号住居址炉址



第3号住居址と第4号住居址埋甕



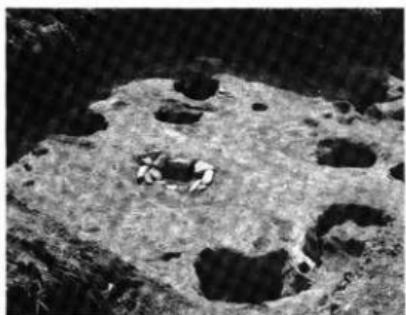
第4号住居址埋甕



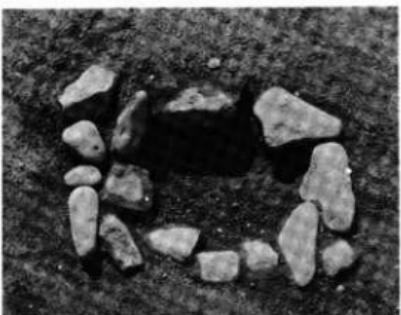
第5号住居址



第5号住居址土器出土状態と石圓炉



第6号住居址



第6号住居址石圈炉



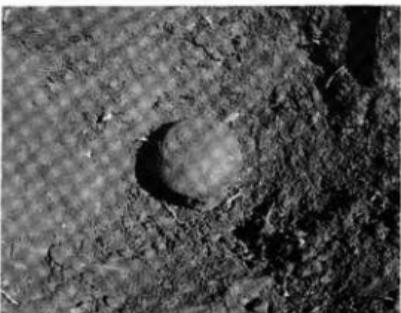
第7号住居址



第7号住居址土器出土状态



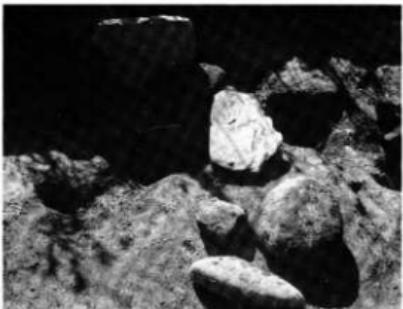
第8号住居址



第8号住居址小形器出土状态



第8号住居址土器出土状態



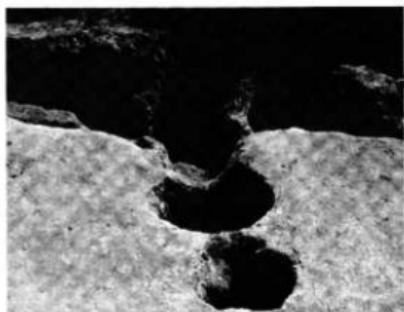
第8号住居址南周溝



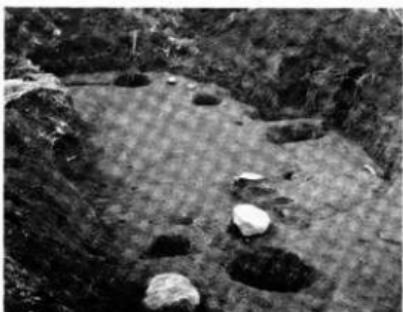
第9号、10号住居址



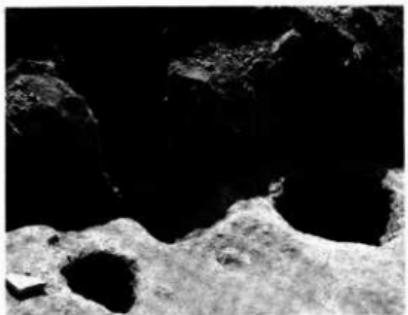
第9号住居址



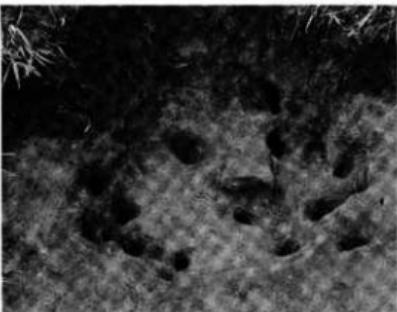
第9号住居址南側周溝とピット



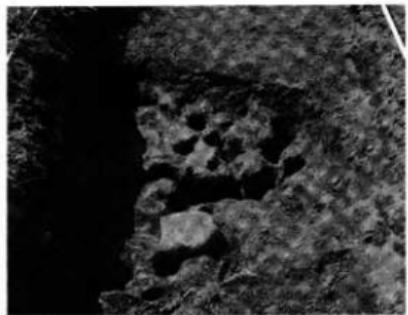
第10号住居址



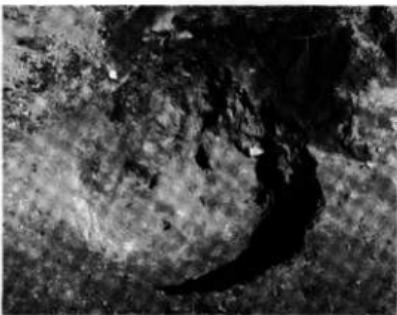
第10号住居址南側周溝とピット



ピット 1 号



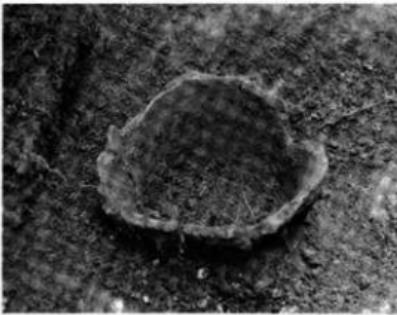
ピット 2 号



ピット 3 号



ピット 4 号



独立土器

第三号住居址出土土器



東3区出土浅鉢



第三号住居址出土土器



東3区独立土器



第三号住居址出土土器



ピット2号出土土器



第五号住居址出土土器



第五号住居址出土土器



第四号住居址埋甕



第五号住居址出土土器



第六号住居址出土土器





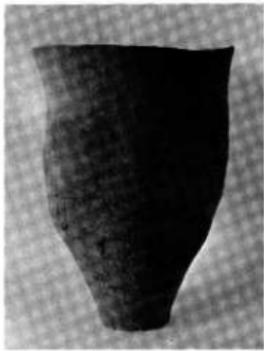
第8号
住居址出土土器



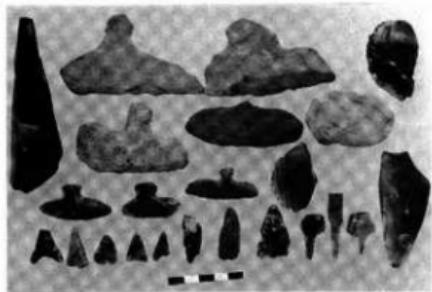
第8号住居址出土土器



第7号住居址出土土器



ピット3号出土土器



石匙、石鎌、石鏃



石斧

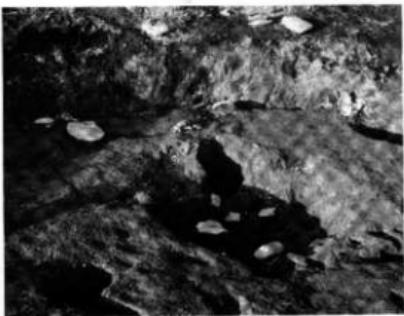
和田遺跡



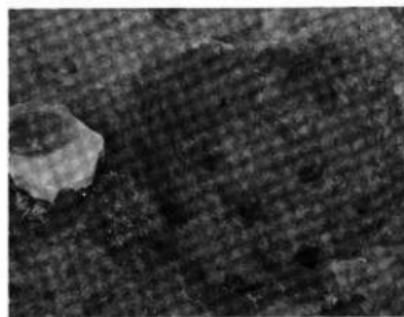
和田遺跡と小泉団地



第1号住居址



第1号住居址炉址竖穴



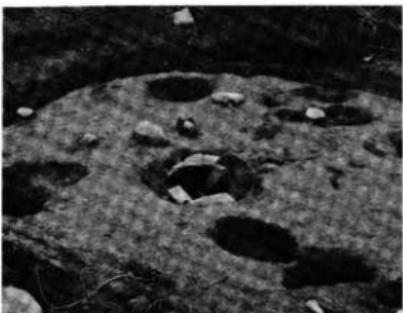
第1号住居址内ビット 1号



第1号住居址内ビット 2号・炉址竖穴・ビット 3号



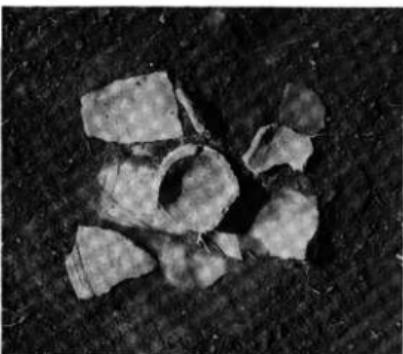
第2号住居址



第3号住居址

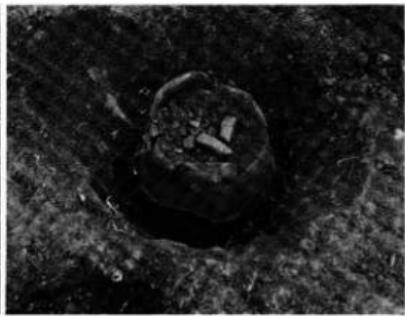


第3号住居址出土器物状态





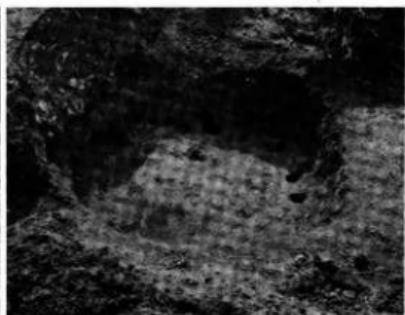
第3号住居址土器出土状態



第3号住居址埋甕



第4号住居址



ピット4号



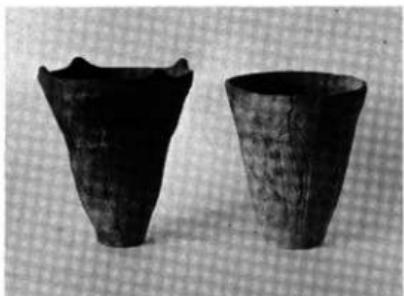
第3号住居址埋甕



第3号住居址出土土器



第3号址出土土器



第3号址出土土器



第3号址出土土器



第3号住居址出土土器



精円押型文土器および石器

中ッ原・和田遺跡

昭和49年3月25日 印刷

昭和49年3月30日 印刷

長野県茅野市もの4104番地
発行所 茅野市教育委員会

長野県岡谷市川岸108番地
印刷所 中央印刷株式会社

(非売品)

